

この素晴らしいセシリーさんにも貢物を！

ツーと言えばカーな私

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セシリーさんにとって（ただ癖者が好きなだけで性癖も歪んでるけど）やさし（くてこのすば特有の常識人じやない）彼氏夫がいても良いと思うの。

目次

一目見て	1
夫になりました。嫁が可愛いです。	16
悪魔退治と洒落込む	28
紅魔族とアクシズ教を混ぜると少し溶けるが反発し合う	55
初めてのパーティ……？	71
強化フラグ	79

一日見て

…自身を包んでいた光が止んで、目を開ける。
新しく入ってきた日の光に眉を寄せながらも周りの状況を確認した。

今更見ないようなレンガ状の家が数々と並ぶ街路、飛び跳ねてる野菜を逃さぬように必死で網を巻きつけてる八百屋の店主らしき男性、畑から秋刀魚を掘り出している農夫、コスプレ染みたダツサイ装備を身にまとった冒険者らしきおっさん達が街に出ようと門に向かっていくのを見てると……異世界だなあ……と第三者の様な視点で感想を述べてしまった。

私の名前は飯野利人。

先程天使さんから魔王討伐を任された逸般人チート転生者である。

とまあ、キメはいいが私なんてこの世界の転生者の一人にすぎないだろう。

そりや自分が死んだって言われたら驚いたし、異世界があるんだって知ったらワクワクした。

転生特典も選べるってなったら更に興奮したし、今も興奮してる。異世界に来る前に私が死んだ事を告げた天使さんからは『あなたって特殊な人ですね』なんて言われてしまった。

まあ確かに普通の人だったら今まで転生していった日本人の生存率や末路、異世界での世知辛さ、貴族たちの聞いただけでも胸糞悪くなる様な裏話、そもそもの言語理解もデメリット有りと聞いた時には異世界転生なんてしないだろう。

まあ、私はしてしまっただが。正直、今の日本にいる方が嫌だと私は思うね。世知辛い世の中、他人から拘束を嫌う節のある私は今の社会に溶け込めていない実感があつた。学校に秘密にやっていたバイトだって『あんた変わってんね』なんてパートのおばちゃんから言われてしまった。仕事じゃ何故だか毛嫌いされてたし。ここだけが

世界じゃないんだとは理解はしているが苦しいものは苦しい。それにそんな余裕もなかったし。一般に私は社会不適合者と言われる人種だったんだろう。

手段の1つに、天国に行つて平穩に暮らすというものがあつたが、人生を17年ほどしか愉しんでいない私からすれば、達観もしていない人生観からお爺ちゃんお婆ちゃんと一緒に日向ぼっこをするなんて生き地獄みたいなものだ。

なにより、最近ハマつていたジャンルが異世界転生なんだ。これに飛びつかない高校生も早々にいやしなと思う。私は突発的に物事を決めてしまったという訳だが：今のところ後悔はない。

話を戻そうか。

私は魔王討伐を目指してこの世界に來た訳ではあるが、別に自由に行動してもらつても構わないと言われた。だが、それでも最初に取つておいた方がいい行動、もといチャートが存在する。それは『冒険者登録』である。

なんでも、この世界での身分を確立でき、今後の生活の役に立つから：らしい。

まあ、天の声とは聞くものだ。望んで聴けるものでもないし素直に従おう。

この街の中心部にギルドがあると最後にご教授を受けていたので天の声響くままに足を運ばせることにした。

ちなみに、冒険者登録をする際はお金がかかるらしく、一文無しなものも流石にサービスが悪いのでと天使さんから登録分十一泊の宿分のお金もといエリスは貰っている。

今から胸高鳴る冒険の日々や大魔法の数々を拝見することになるワクワク感からかスキップ染みた走り方で街中を走つてしまう。

そんな奇行をして景色を楽しんでいるうちに一風変わった建築物が見えた。

掲げられた大きな旗や木製の巨大な扉を見るに、自分がよく知っているファンタジー世界によくある冒険者ギルドの外装に酷似してい

た。

まあ十中八九これがギルドなんだろうけど。というかそうでなかったら恥ずかしい。

それが見えた所で一旦スキップを止め、普通に歩くことにした。

扉の前まで歩き、手を添える。

ギイ：と扉を開け、コツソリと冒険者登録をし早速クエストでも受けようとする…つもり…だったんだけど……。

ドンツ！

力を少し込めたつもりだったのにまさかこんなに力が強くなつてるとは思わなんだ。

先程まで外に漏れていた喧騒が鳴りを潜め、冒険者達一人一人が私を見てきた。

なんだか生徒会長を決める演説の手前みたいな雰囲気だなあ…と頭の中を茶化して歩を進める。

通常の高校生だったら自分よりも圧倒的に体格が大きく、年齢だつて2倍以上は確実にある厳ついおっさんから視線を向けられるのは耐え難いものだろう。

しかし、この時の私はのぼせ上がっていたんだろう。能力を貰い、漲るような力を感じていたせいか、それとも異世界に行った高揚感が残つてでもいたのか厳つい男や勇ましそうな女性の視線をもものともしないで通り過ぎていった。

そして、カウンターへと着く。

冒険者達は少し喋るようになっていて、小声で何かを話していた。新人である私への評価だろうか？

「冒険者登録をしに来たんですが」

「は、はい！で、ではまず登録料として千エリス頂くのですがよろしいでしょうか？」

「はい。どうぞ」

「はい、確かに。最初に確認しておくのですが、冒険者とは何かお分かりですか？」

「ええ。祖父から教えてもらっていましたから。大体のことは…」

とんだ嘘っぱちだ。よくこの状況でコレ言えたと思う。いやまあ、一応知っているには知っているので半分は嘘じゃないけど、よく祖父から教えてもらったなんて清々しく言えたな私。

というか、なんで他ギルド職員の人たちも固唾を呑んで私の事を見てるんだろうか？

もしかしてさっきの衝撃で扉が壊れたんだろうか？え、じゃあ弁償しなくてはいけないんだろうか……。どうしよう、金なんて今出した千エリスと安い宿一泊分の六千エリスしか無いのだが……。

「それではこの書類に……自身の名前、身長と体重、身体的な特徴などがあれば御記載ください」

「あ、はい」

特に嘘を書く必要もないので事実のみを書くつもりだが、体重と身長は一年前のやつでいいだろうか……。測ってないから分からないな……。

書いたものを渡すと次は水晶玉に似た何かが出てきた。なんかフェアリーテイルのラクリマに似ている気がする……。気のせいか？

「それでは、この装置に触れて下さい。貴方の筋力値、敏捷性、魔力量などが数値化され冒険者カードが作られます」

「へえ」

装置に手をかざすと指紋を読み取られるかの様に光が照射され、同時にカードにステータスが映し出されていく。

光が止まると、係員の人々がそれを確認した。

「は？」

「え」

なんだ、どうした。

なんか不具合でもあったんだろうか？

「貴方の体の中には何か宿ってるんですか？」

「え？何がです？」

真顔で怖いというかおかしい事を聞いてきた係員の人に私も真顔で視線を返す。

アレかな。今頃厨二病が舞い降りたのかなこの人に、だとしたらこれから人間関係というか周りの人達が大変そうだな……。この人も厨

二病が終わった後に黒歴史になってしまった数々の事で思い出して悶えてそう……。真顔から段々と可哀想な人でも見るかの様な視線に変わっていくのが自分でもわかった。人にこんな視線を送る側になるなんて……。死んで転生してみるもんだね。

やがて、カウンターの人が吹っ切ったようにため息を吐くと突然大声をあげた。

「何なんですかこの筋力値と魔力値は!!?他のステータスもずば抜けてますし!!?貴方の体に一体何が詰まってるんですか!?!怖いんですが!?!」
いや、怖いと言われても……。というか人に怖いなんて言われたの初めてですよ。

でもおかしいな。私は彼女に純孤さんの能力のみを貰った筈なんだけど……。身体能力もそのまま貰ってしまったんだろうか。まあ、そうだとしてみもこちらにメリットしかないから良いんだけど。というか後ろのギャラリーが少し騒がしい……。

「ンンッ！失礼しました……。正直に言いますと、アークウィザード以外でなら貴方は全ての職に就けます。私のおすすりめとしてはソードマスターあたりが良いのですが……。どうでしょう?」

「一応、他の職業も聞かせて貰えないでしょうか?」

「はい。貴方のステータスでは【アークウィザード】以外でなら本当に何にでもなれるので全てご紹介させていただきます。まず、パーティの盾役と言われる【クルセイダー】パーティを回復し強化する【アークブリースト】ダンジョンなどで活躍する場の多い【盗賊】その上級職である【暗殺者】^{アサシン}こちらは盗賊とは使用用途が違いますが、上位互換という形になっております。どちらとも夜、またはダンジョンで活動する場合は殆どですね。不意打ちが専門なので。そして、精霊と契約を交わし精霊の力を利用し魔法を使う【エレメンタルマスター】……。こちらはなれるにはなれるのですが、精霊から好かれる才能がなければ魔法が使えないので、ステータス面では申し分ないんですが……。あまりオススメしません。この【ルーンナイト】という職業は魔法の使える剣士と違ってただければご想像しやすいと思います。【ソードマスター】との違いは万能か、火力特化かという二点です。次に【クリエ

「イター」というこのクラスはゴーレムを生み出し使役したり、錬金術を用いたりする【ルーンナイト】とは違うベクトルの万能職です。魔力値は高ければ高いほどゴーレムも作り出せるのでこした事はないですが、このクラスは冒険者になるあなた方の『センス』によりゴーレムの強度や練度が左右されます。最後に【アーチャー】こちらのクラスは魔法職に比べると威力が大分落ちてしましますが、弓スキルをメインにモンスターを討伐しています。他にも、遠くを見渡せたり暗い場所でも目が見える様になる【千里眼】スキルによりパーティの安全確保などを行えます。他にも【ソードマン】、【ナイト】、【プリースト】とありますが、先述した職業の下位互換なので、選ぶ必要性はないです。【ウィザード】は貴方の魔力量ならこれからのレベル次第で【アークウィザード】になれる可能性は大いにありますが、貴方の筋力を無駄にするのは少々勿体ない気がします…他に何かご質問はありますか？」

「……聞いていて思ったんだけど、よくここまでの職業を分かりやすく纏めて丸々全て私に説明したね…優秀すぎないかな？君、違う職業に就いた方がいいんじゃないかなあ…」

「それと、さつき心の中で厨二病患者だと思っただけの視線を送っていたのはすまない。」

「それにしてもどうしようか。ソードマスターがおすすめと言われているけど、ぶっちゃけどれでもいいんだよなあ…。純孤さんの身体能力まで私に移されたとしたら…本当に勝てる存在なんて早々に居ないだろうし。人間じゃ絶対…いや人間以外の怪物たちと戦うんだけど。」

「アークプリーストでお願いします」

「前衛職ではなくてよろしいのですか？」

「ええ、まあ」

「それでは、カズト様！ギルド職員一同、貴方の今後の活躍にご期待しております！」

「そう言われると同時に、後ろにいる冒険者達の歓声に近い称賛の声

が次々と挙げられた。

すげえやつが来たもんだぜ…とか、新人には俺たちの流儀つてもんを教えてやらねえとなあ…とか、案外、アンタみたいな奴が世界を救っちゃうのかもな…とか。

…アレだね、やつぱりこの感じがいいね。

異世界に来たって感じがあるわ…。

それにしても冒険者達の豹変ぶりが凄いな。さっきの重苦しい雰囲気はどこに行ったんだろう。

ちなみに、この後壊したあの扉を弁償するよう言い渡されて、早速借金に追われる羽目になりました。(残り二十九万四千エリス)

…世知辛さつてのはこれかな…天使さん。

◇

…自分の冒険者カードを見て唾然としている。

早速この世界のスキルでも覚えようとしたが、覚える方法が分からず、先程自分を相手にしていたスズさんに聞いてみれば冒険者カードから取得できると聞いた。

そして、それらしき欄があったので見てみれば《ヒール》に《ターンアンデッド》、《パワー》などなどこの世界のスキルが記載されていて、横には必要なスキルポイントが書かれていた。

《ヒール》5ポイント、《セイクリッド・ヒール》15ポイント、《セイクリッド・ハインス・ヒール》25ポイントと言った感じだ。まあ妥当なポイント量だと思う。

このスキルポイントはモンスターを倒し、モンスター達が持つ魂の経験を自分の魂に吸収させレベルアップする事で行き入るのだが…元々の潜在能力次第で最初から持つてる者もいるにはいるらしい。しかし、そんな存在は稀であり、持っていたとしてもポイントは少ない場合が多いらしい。

では、今自分の目の前に表記されているポイントは何だろうか？

《スキルポイント 5000000000》

五億。それが私のポイント欄に書かれてある。

私は転生特典を3つも頼んだのだろうか？

純孤さんの能力は自ら望んで手に入れたものだから当然として、身体能力までも受け継いだのは嬉しい誤算だったが…この大量のスキルポイントは何だろう。

もしかして、これも付属として貰い受けたのか？だとしたら天使さん。極端に与え過ぎやしないですかね。

いや…：もしかしたら、これも純孤さんの能力の影響なのかもしれない…：断定するには早いが純孤さんはそういう規格外な存在だからあり得るにはあり得る…。

まあ、これも今後が楽になると考えれば嬉しい事だが…：仲間が出来た時に一緒に高みへ行くという楽しみが一切失われてしまった。

少し残念に思いながらも、表記されている全てのスキルを覚えた。勿体ぶってる必要もないからね。

でも、どうしようか。

スキルポイントが1000近くしか使われていないのだが…。これを誰かにあげることって出来ないのかな。

◇

スキルも覚えたところで、クエストを受けようとしたところ。

「流石に前衛もこなせるとはいえ、支援職のみでのクエストは厳しいですよ？いくら貴方の馬鹿げたステータスとはいえ」

至極真つ当な答えが返ってきた。というか若干失礼になつてませんかね、スズさん。

「せめて1人や2人パーティ組んできてからにしてください。それでも行くというのなら止めませんが…」

「大丈夫ですよ、軽い様子見程度で終わらせるつもりです」

「そうですか？…それなら…」

受けたクエストはゴブリンの討伐、まあ初心者からしたら十分なクエストだろう。

「このクエストの近辺では初心者殺しが確認されています。十分気をつけて来てください」

「え？あ、はい」

初心者殺しと言われても何のモンスターだかは分からなかった。取り敢えず名前から、私の様な新人の冒険者をハントする様な存在だろうという予想はつく。

ちゃんと調べてから行くのが定石だが、純孤さんの身体能力がある時点で有象無象の生物に負けるとは到底思えなかった。いい加減、授かった力を過信するのもよくないと思うのだがいかんせんその考え方は治らない。

目的の湖畔に着き、木陰からゴブリンたちの集落を見つめる。

ゴブリンたちは一体感のない錆びれた鎧や片手剣に盾と装備していて、追い剥ぎなどしてかき集めた感が半端なかった。小柄な体と錆びれた一体感のない装備を見てるとより貧相に見えてくる。

身の丈にあっていない装備を着るとあそこまでダサくなるんだなあ…と場の雰囲気合わない思考を抱いてしまった。

さて、ここからどうしたものか。スズさんには軽い様子見程度つと言ったが、全くそんなつもりはない。

きつちり全員あの世に送ってあげるつもりで来た。思考が穢れに穢れているが、純孤さんも嫦娥嫦娥言っと思いつきり復讐を企んでるから穢れとか関係ないだろう。

純孤さんの身体能力を受け継いでいるので軽くゴブリンの首でも振り切ってもいいが…能力を試したい気持ちもある。

まあ、結局はどっちも試す羽目になるだけだよ。

「ギィ？ギッ！ギィィィィィ！！」

見張り台のゴブリンからこちらに向けて雄叫びが挙げられる。

それに呼応して集落のゴブリン達はこちらを見てきた。

「かわいいそうな子たち…」

静かに話しかける様にねつとりと言葉を使う。

「私が救ってあげるわ」

誰もが聞いたら臆するような声でゴブリンに処刑を宣言した。

……決まった！

ちよつとカツコつけたくて言いたかったセリフが言えた！

もしここに人がいたら墓場まで持つてく黒歴史だけど……いないからセーフだよ。

戦い慣れも喧嘩慣れもしていない自分に刃を立ててきたゴブリン達は、純化した死の概念を与える事で死んでしまった。

純孤さんの身体能力も試そうとゴブリンの頭を掴み回してみた。気持ち悪い音を出しながらゴブリンの頭は千切れ死んでいく。

抱きしめてみようとしたら鎧や骨ごと壊れ、血の雨を降らせながら内部から爆発してしまった。これには流石にグロ過ぎたので吐きそうになった……自分でやったこととはいえ、やる事がえげつないと思う……でも何でだろう……気分が良いな。

突然こんな事を言いたくなった。

「不倶戴天の敵、嫦娥よ！見ているか!!?お前が私の前に現れるまでコイツらをいたぶり続けよう!!」

キャラになりきりたいという思いからこんなセリフを吐いたが、男の声になるので何かしっくりこない。ただ、叫びながらモンスターを殺していくというのは、側から見れば頭おかしいやつだが……結構無双ゲーム感があって気持ちが良いものだ。

もう一度抱き上げ、締めて、ゴブリンの肉体が爆発四散する。血と臓物に塗りたいくれないながらも大分気分が良い。また新しいゴブリンを締め上げてる最中にゴブリンが私に刃を突き刺してきた。鋭い痛みと肉が裂けるような生々しい音を聞いて現実に戻されるような感覚に落ちる……刃を引き抜きゴブリンの目に思い切り突き刺すとそのまま地面にクレーターが出来るほどの拳骨を喰らわしてしまった。当然のようにゴブリンは圧殺された血と内臓が床に飛び散る。軽く『ヒール』と答えると簡単に怪我が塞がり逆にイイ気分になってきた。自然と頬が釣り上がって中々味わえない気分になってきた。

その笑みを見てか、それとも仲間の死骸を見てか生存本能が働いた

のか生き残ったゴブリンたちが逃げていく。

追いかけてよとしたが、そんな面倒な事しなくても能力使えばすぐ済む話じゃないか。と思いついたので逃げ惑うゴブリン達全員に向けて純化した死を与える。すると全員パタリと倒れて死んでしまった。

「やっぱりゴブリンじゃこんなものか…」

序盤に出てくる雑魚に最強ムーブをかますのは弱く見えるだけだな…と自分の行動に反省する。一度落ち着いた所為かゴブリン達を殺す度に吹き出た血が体に伝っていく感覚が気持ち悪く感じてる。

そういえば、水質を改善する魔法があったような気がする。

「たしか……『ピュリファイケーション』」

自分の体が灰かに光ったかと思うと血が全て水になっていた…!?

いやでも艶かしい感じが無くなっただけで血生臭さはすぐには消えなくてより一層気持ち悪くなってくる…。

というかなんだこのめっちゃ噛みそうな名前をしてるスキル。効果は地味…と言っても元の世界じゃ世界救う可能性すらあるな…私の戦闘スタイルの場合だともっと必要になるけど。

今更だけど、服どうしようか…この一張羅しかないぞ……

ハア……とため息をついた瞬間――

「ギャ!!?」

陰から飛び出してきた相手の爪をひっ掴んだ。

…自分でも驚いている。

なぜ反応出来たのか…明らかに鋭利な爪を素手で掴んでいる。明らかに自分よりも体格が大きいモノを素手で押さえつけている。先程のゴブリンよりも違和感は大きくなった。急に純孤さんの身体能力を写されたせいかな、いつものような感覚で力を入れるとまだ大きな力の差が生まれる様である。

相手は虎…というよりはサーベルタイガー…いやモンハンのベリオロス…いやでも翼脚だった部分は完全にネコ科の足になって

るし：まあいい、おそらくクエストに行く前にスズさんが言っていた初心者殺しとはこいつの事だろう。

先程のゴブリン達とはワンランクもツーランクも上の存在に見えるが：逸般人チート転生者になってしまった自分には弱く感じてしまった。

相手との力は均衡しているかの様に見えるが、実際のところ自分はそのままで力を加えていない。相手の必死な様を見るにコレがコイツの限界だろう。

「お前もここで新人の冒険者は狩ってきたんだろ？今みたいに、なら狩られる覚悟はあるよな？」

よくアニメとか漫画で使われるようなセリフを自分なりに言い換えて、私は初心者殺し？の頭を握りつぶした。

◇

あまりの呆気なさにコレがチート転生って奴か：と変な違和感を持ってしまう。

この世界に来てからどうもおかしい。まあゴブリン達に喧嘩：というより処刑宣言をした時は完全にカツコつきたいが為に言ったが、殺すのを楽しがっていたのは完全に異常だ。紛れもなく本心で楽しんでいたので。ていうか最初からゴブリンの首を振り切ろうとした発想自体とんでもない。普通に考えて怪力ステータスあるのだとしたらそこらの石を投げるのが定石だろうに。：違和感が酷い。身体と精神が付いていけないキャラクターみたいだな。

まあ、天使さんがこの世界に慣れるよう精神を弄っただけかもしれないし、言語理解のデメリットで文字通り頭がいけない方向でパーになったのかもしれない。：原因は分からないが現状、思考と精神の齟齬ぐらいしか特に困ったこともないのでしばらくはこのままでもいいだろう。

にしても、この気色悪いビショビショ状態をどう乗り切ろうかなあ…。

…：解決策がない。いやあるにはあるが、方法が自分がこのただっ広い野原の上に裸になって服が乾くのを待つことだけで、滅多に人が

通らないといっても近場でクエストをこなしている冒険者もいるわけ
で素っ裸の状態にいるというのも流石に領けない。かと言ってビ
シヨビシヨのままで行くのも……。

能力でなんとか……いやそもそもベクトル違うし。

色々考えたが結局解決策は思いつかなかった。

はあ……諦めて街に戻るか。

◇

グジョグジョと靴を鳴らしながら歩いている様は完全に変な人だ
ある。雨も降っていないのに靴を濡らすとかどんな状況に遭ったん
だって、普通の人なら思うよね？思わない？そう……。

服と髪は歩いているうちに乾いたが靴はそうもいかなかった。

もう街中で裸足になって歩いてみたいもんだが、そうならなん
か警察の人とか呼ばれそうなのでやめておく、もうこれからは肉体に
頼らずに能力だけでクエストやっていこうかなあ……なーんて思っ
ている時。

「アクシズ教をお願いしまあーす！ほら！その幸薄そうな貴方！ア
クシズ教に入れば宝くじが当たるとか急に彼女が出来たりとか色々
といい事が起こるとかなんとかあるそうですよ！ここは入るしか
ないですよ？そうですよね！さあさあさあ！アクシズ教に入りま
しょう!!」

「いや、は!?アクシズ教!?何デタラメ言ってるんだ！ウチは代々敬虔
なエリス教徒なんだ！関わらないでくれ!」

「ならー絶対にアクシズ教の方がいいですよ！アクシズ教に改宗しま
しょう！エリス教団になんて入っていると尚更不幸になってしまいま
すよ！今なら100%アルカンレティア産の新鮮な聖水を二つ！更
にはアクシズ教の美人プリーストとのお食事が出る権利がついて
きますよ!!」

「結構だ!!」

街中で随分と騒がしく宗教を呼びかけてる人がいるもんだ。
なんとなくそつちに近づいてみる。

やけに人が密集していたので前に出るよう『すみません…』と言いつつながら掻きわけるように入っていく。

やがて最前列に辿り着き騒がしい状況を作り出している本人達が見えた。

そこには、この街の男性と思われる普通の住人と、やけにハイテンションでアクシズ教という宗教を勧めてくるシスターの風貌の女性があった。

あ、男性が逃げた。女性は逃げる男性を追うこともなく辺りを見渡す、どうやら相手にそこまで固執はしないようだ。まあ、厄介ごとは自分の好物なのでしばらくの間女性の動きでも観察しようか、靴が乾くまで時間もかかるし…というか気を紛らわしたいだけだけど。

あ、シスターの人が動き出した。どうやら次のターゲットを発見したようである。

どうやら此方の方面にいるようだ。凄い勢いでこっちに走ってくる。後ろを振り返ってみれば先程まで掻き分けて入った筈のギャラリイが居なかった。……ん？

「イケメンみつけええええええ!!」

「もしかして私?」

目の前にはいつものまにか息を荒げた金髪のプリーストが………

………女神さまですか？

待って、どうしよう。女神がいる。全てにおいて完璧に可愛い女神が目の前にいる。

女神さまは私の事など気にせずに腕を絡めてきて言う。

待って、やめて、その恍惚とした表情で見ないで…本当に貴女が好きになるから…ちよ、待って。本当に、心臓痛い。

「ここで会ったのはきつとアクア様の思し召し! 貴方と出会ったのは運命なのです! さあ! この婚姻届と入信書に早くサインを!!」

「え、あ、いや…その、む、胸当たってるんですが…」

「恥ずかしがらなくていいんですよ？さあ！今こそ入籍を！そして入信を!!」

「え、あ…うー…はい」

「え…!!?ヨツシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

腕だけではなく首元に抱きついてきた女神に私は抗う術を知らなかった…そのまま彼女の抱きついてきた勢いに負けて街中の街路のど真ん中でぶっ倒れた。

夫になりました。嫁が可愛いです。

この街に来てから一週間程経過した。

最初の1日とその後の三日間は特に異常な日だったのを覚えている。

当然それはセシリーとの結婚騒動からなるものだった。…異世界転生して数時間ですぐに結婚するなんて誰が思うんだろう？スピード結婚にも程がある。

まあ、逆告白を受諾した事については微塵も後悔がないんだけど。

あの時の彼女からしたらいいイケメンがいた程度の事なんだろうが…今ではそのがめつきに感謝している。

まあ、何も全て円滑に進んで結婚した訳ではない。

婚姻届を提出してから正式に結婚をするものなのだが…問題が発生した。

それは、お互いに貧乏だった。という事である。

セシリーは借金をしている訳じゃないが、エリス教徒から配給のパンを獲ってくるぐらいには貧乏で、私はこの世界に来てから早々に30万近くの借金をした金すら持っていない奴である。

まともに結婚式すら開けない状態で結婚生活を始めた訳だが…

この世界は結婚したら必ず結婚式を挙げなきゃいけない決まりでもあるのか結婚式を開く事になった。(本当はセシリーの我儘)

しかも費用が800万近くするやつ。

セシリーがやりきったと言わんばかりに胸を張っていた姿は非常に可愛らしかったので私は許した。というか普通に許せる範囲だった。逆に可愛さが増えてくるまである。

800万なんて冒険者が2年以上クエストをこなしても全然足りないような金額ではあるが…私はそれを愛の力(物理)で3日かけて稼いだ。

どうやったのか聞かれれば…(王都の)クエストを(三日間徹夜して)ソロでやり続けたとしか言いようがない。

そのせいか『頭のおかしいアークプリースト』だの『バサプリ(バー

サーカープリーストの略)』だの『アクシズ教徒のやべーやつ』だの散々言われた。まあ、アクシズ教である事是否定しなかったが……だってクエストを受注する際もクエスト中の時もアクシズ教のペンダント(セシリーからの贈り物)を肌身離さず身に纏っていたし、入信書にも婚姻届と一緒に書いたし。

……まあ、そんな私の努力があり1000万もの金を稼いでから早々に借金を返済し、式典を挙げた。

会場に行けば満員だったが、会場に埋まっていたほぼ全員がアクシズ教徒でセシリーの知人だか友人だか赤の他人だった。

全員が全員祝福するような視線ではなく、一部はセシリーを睨んで羨んでいた人たちもいた。

主に女性メンバー中心に。

まあ、セシリーはそれをものともせず「お先に失礼します！」って私の腕に抱きつきながら言っていたが……あの時の女性陣と目にはゾツとしたがナニか来るものがあつたな……。まあセシリーさんに抱きつかれた事でなんとも思わなくなつたけど……ウチの嫁つてマジ天使。

男性メンバーも居たにはいたが、どちらかという式典に参加した後の参加賞と食事が目当てで来ていたようだ。

後から聞いたが、女性メンバーも大半がその目的だったようだ。途中からセシリーを処す計画を練っていたらしい。そんな計画は勿論潰させて貰ったが。

更には結婚式場でセクハラ行為をやってる男女を見たときは流石の私でも引き攣つたな。

アクシズ教徒がどんな宗教団体なのかこの時に理解し始めた気がする……。

まあドタバタして始まり、ドタバタしながら終わったこの式だが、やはり一番の見どころはウェディングドレスを着たセシリーを見られたところだろうか。アレは正しく女神だった。もうあの時、頭の中では彼女に抱きついて愛を吐露したい感情でいっぱいだった。今でも思い出すと自然に笑みがこぼれる。あの時一度しか見られなかつ

た純白のドレス：なんか最後の方は泥だったり野菜の投合攻防戦になった時の野菜の汁だったりドレッツシングだかが染み込んで弁償する羽目になったが……また見たいな。

そんな日々を終えて数日後の朝になった。

隣で寝ている自分の嫁の柔らかい肌をなんとなく触る。特に意味はない。

そうすると、頬を緩ませて「ウエへへ……めぐみんしゃんおねえひやんにあみやえたきゆなつちやつたやんですかあ？」と、寝言を言った。可愛い。

めぐみんという名前はギルドで度々聞いた事がある。

確か爆裂魔法のみを使う頭のおかしい珍しい紅魔族と聞いた事がある。

セシリーが一度エリス教徒に強姦されかけた(セシリーが配給のパンを盗んだ為に捕まっただけの)ところを助けたスパー可愛い口りっ子系美少女ともセシリーから直接聞いた。

妻の身を助けて貰った身としてはその子に絶対の忠誠(セシリーを除く)を誓ってもいいが、セシリーがなんていうかな……自分だけ独り占めとかズルイ！って言い出しそうだ。そんな時は二人で分け合えばいい話なんだけど。彼女は納得してくれそうにないな。

さて、早めに起きてしまったがどうしようかな。

朝食を作るにしても食べるにしても寒い廊下を歩かなければいけない。それは非常に面倒だ。

熱を純化させていくのもいいが、それは熱という粒子運動がただありえないくらい早くなるだけで『熱い』から『痛い』になるだけだ。私の身体とて純化した物は本来の持つ力を取り戻しているというのに等しいのだから傷を負う。最悪死ぬ。そんなギャンブル犯してまで備え付けのキッチンまでは行きたくない。

肝心の服は残念ながらベッドの外だ。早着替えでもしたいが自分にそんな技能はない。

というか、力加減間違えたら服が破けそうだ。

昨日もセシリーを傷つけないためとは言え彼女が動きつきりだっ

たからなあ…いやまあ、彼女もそれはそれで楽しかったそうだが。

力の調節は今後の課題だな。

もう一度彼女を見やるとシーツが剥がれかけて素肌が見えていた。何かに抱きついているのかシーツが纏まり皺が出来る。

「ふあーろう、にやんできよんなに可愛いんれふかめぐみんしやんはく…！」

貴女の方がよっぽど可愛いよ。

そう言いかけたが、彼女の睡眠を邪魔してはいけない。

ここは静かに心の中で…：やっぱ無理。

私は遠慮なくセシリーに抱きついた。そしたら打たれた。

彼女にもびっくりするということはあるらしい。

痛い。

ちなみにその後2発打たれた。可愛いロリっ子との幸せの時間を壊された腹いせらしい。

…これも痛い。

というか、私が襲った時よりもなぜ多い…。

今更思うのだが、これは付き合ってからという意味でも、結婚してからという意味でも、邂逅してからという意味でもそうだが、たった4日でここまで異性と事が運ぶのだろうか？壁も容易く超えてしまった。因みに彼女から誘ってきた。彼女があのアクシズ教だといえシスターという立場上そういう欲に塗れたことをしちやいけないただとか、本人の性格上全く興味がないと思っていたのだが意外に率直だった。最初は戸惑ったが、「貴方しかいないの！」なんて言われたら断れるわけなんて無かった。

身体中に出来た互いのキスマークを隠すことには成功したが、激しく動くとバレる箇所にやってしまった為若干動きがぎこちないのはご愛嬌。

「やっぱり自分の夫に作らせて食べる朝は最高ね！」

「おおー。なかなかの好反応だね。ただ焼いただけなのに」

「久しぶりに見たかもしれないわ！黒くないお肉なんて！」

「今までどんな料理してきたのか気になるけど、今は聞かないでおくよ」

「デザートは？デザートはあるのかしら!？」

「朝からデザートってどうかと思うけど、まああるよ。セシリーの好きなどころてんスライム。因みに今日はリンゴ味ね」

「やったー！夫がいるとこんなにも生活が変わるなんて思わなかったわ！結婚して良かったー！」

「夫としてはその言葉は嬉しい限りだよ。もつと囁いて欲しかったり…」

「美味しいわー！じゃんじゃん作って頂戴ね！」

「……」

期待の言葉は与えられなかったが、それでも自分の料理を褒めてくれるのは嬉しい。

美味しそうにソーセイジやらサラダやらを頬張っている彼女を見てると頬が緩んだ。

結婚生活ってこんないいものなのかな。まあ、いいものなんだろう。結婚生活は人生の墓場という人が居るが、生憎この世界じゃ通用しないようだ。まあ、私は自分がかかなり倒錯していると自覚があるので、普通の人だったら…あんまり喜ばないかもしれないが。

クエストを受けてモンスターを倒し、金を稼ぐ。

2日前にやったのは式典を開くためであるが…今回は普通に生活費を養う為である。

目の前に居る白狼の群れが私に威嚇の意を込めてか睨みつけている。

どうやら相手はこちらを敵とみなしているらしい。まあ、そりやそるか。同族の頭を手からぶら下げてるやつなんて敵としか思えない。

「グルルルル……グオオオオオオ!!」

リーダー格っぽい一回り体格がでかいのが雄叫びをあげた。同時に手下の白狼は私目掛けてそれぞれ違う方向から走ってくる。攪乱させて私を一気に仕留める作戦らしい。知能は割と高めの個体の様だ。人に限る話でも一部の生物でも通じる話ではあるが、生物は物体を認識するのに約60%を視覚に頼っているらしい。その60%という認識の占める割合から視覚の混乱というのは脳を混乱させ思考を麻痺させるという点において良い手だと思う。相手はその原理なんて知らないだろうが、こうやったら相手を仕留めやすい……みたいな感覚を知ってるからこういう戦い方をしているんだろう。

「まあ、私の様なチート転生者たちには意味ないんだけどさ……」

純化した死の要素を与えるとすぐに生物は死を迎える。

血もなにも吐かずに死んだ白狼の死体を見れば瞳は未だに輝いていた。

この純化させるといふ能力は生命を持つ相手なら無類の強さを誇る。例え不死だろうがそれは例外ではない。というか、不死ほどこの能力は効くだろう。不死ほど生命力という大きな穢れを持つものもないだろう。

ついさつき殺した相手を見て、死体に随分と慣れたもんだなあ……あんなにグロ画像無理だったのに……と自分の変化を感じた。

街に戻った後はギルドに行つて、クエストの終了を報告した。

何故かスズさんが苦笑いしていた。どうやらだいぶ疲れてる様だ。大丈夫だろうか？最初にお世話になったので相談事があるなら聞か……流石に無粋だろうか。

渋々と渡された40万エリスを手にして家教会に帰った。

にしても、ギルドに入った途端『頭のおかしいアークプリーストだ』なんて囁かれる様になっていとは思わなかった……。

それにしても、もう自分がソロで冒険している事は当たり前という感覚を抱いてしまうようになったな……本来なら後方支援役のジヨブ

の筈なんだけど…仲間が欲しいなあ……これから仲間を集め様にも王都でもヤベーやつとか言われているし無理そうだけど。

「ただいまー」

そうこう考えている内に教会の扉を開けていた。それにしても教会にただいまと言えるなんて随分と特殊な環境だなと今更思う。

「おかえりなさいーあ・な・た!!」

エプロン姿をして片手に自分が作ったであろう唐揚げを乗せた皿を見せびらかしているセシリーが待ち受けていた。

いつからそこで待ってたんだろう? 今日って帰りが何時か分からなかったから教えてないはずなんだけど…。

…料理の方を見れば努力して作った事が伺える、だって、顔とエプロンが所々炭で汚れてるし……一体最初はなにを作ろうとしたんだろう? いや、皿に乗ってる唐揚げを見れば唐揚げを作ったと分かるんだけど、何故炭の汚れが?

「私、今日は頑張ったですよ! いつもならお店で売ってるものを買ってあたかも自分が作ったかのようにしてるけど今日は違うんです! 私が作ったんですよ!」

え、そうだったの?

いやまあ、朝の会話でなんとなく察してたけどそうだったのか…? そういえば台所にパックのスープの素とかいっぱいあったな…。今更だけどなんでパックに封する技術がこの世界にあるんだろう。魔法かな?

いやでもそんな事より……マジでか。セシリーさんマジですか。私の為にわざわざ料理を作ってくれたんですか。

え、ちよつと待って普通に嬉しい。涙出そう…あ、出た。

「え、ちよつと?!?なんで泣いてるんですか!?!」

「いや…まさかセシリーが私のために努力してくれてると考えるだけで嬉しくて…」

「え!?!」

「今まで全然家事しなくて、私に任せきりだったから、私の事を都合の

良いイケメン兼道具なんじゃないかなって…少し心配してたから、いやでもそんな扱いでも普通に貴方のことが好きだけど！」

「確かに私って自分勝手な女って最近自覚し始めましたがそこまですか!?それに、私がそんなエリス教徒みたいな事してると思えますか!?というか中々良い趣味を持つてますね！」

「良い趣味ってなったらセシリーもだろうか？」
ロリコンとシヨタコン

「話をはぐらかさないで下さいよ！」

「ハハ…それでさ、今日は何を作ってくれたの？」

「またあ…！もう！今日は食べさせてあげませんよ！」

「ごめんなさい」

「謝るの異様に早いですね…：…そんなに食べたいんですか？」

「そりや妻の初の手作り料理だよ？食べたいに決まってる」

「じゃ、じゃあ今日から私の事をセシリーお姉ちゃんって…：…」

「第三者から見たら夫が妻をお姉ちゃんって呼んでいるのは大分不味いのでは？」

「今日だけ！それか、二人だけの時でいいから！ね？」

「ね？の破壊力が凄まじいなおい。」

「こんな可愛い嫁のお願いを断るわけがない。」

「迷いなく言い切ったね。」

「セシリーお姉ちゃん☆」

「はうあっ!?!」

彼女はそのまま感動してか、感激してかは知らないが後ろにぶつ倒れた。

…：…頑張って作ったであろう唐揚げを床に思いっきりぶち撒けながら…：…。

倒れた彼女を見れば幸せそうに気絶している。…：…人ってこんなに気絶しやすいものだったのだろうか？

「セシリーお姉ちゃん！大丈夫？セシリーお姉ちゃん！」

そのまま半分巫山戯て彼女をお姉ちゃんと呼んで安否を確認する。

すると、彼女はすぐに目を覚まして私に抱きついてきた。

「わぷっ」

「ああもう！本当に年下っていいわあ〜！」

すぐに彼女の豊かな双丘が当たる。

昨日で慣れたはずだが、やっぱり慣れていなかったらしい顔が赤くなっていくのを感じる。本当に柔らかい……。同時に何か自分の肩にツーンと何かが流れていく。何が？と様子を見ればそれはセシリーからの鼻血だった。

「え、ちよつと鼻血出てるけど!?大丈夫!?セシリー!?!」

「ああ！耳元に！耳元にもう一回言つて!!お願い！」

「いや、その前に鼻血なんで出てんの!?セシリー!?!本当に大丈夫!?!」

「大丈夫!!お姉ちゃんは大丈夫だから！お願いだからセシリーお姉ちゃんつて言つてー!!」

「セシリーお姉ちゃん♪」

甘声でもう一度彼女を呼ぶと物の見事にぶつ倒れた：私の声つてそんなシヨタっぽい…?」

それにしたつて鼻血が酷い。

……一体何に興奮したのかは分かるが、そこまで興奮するものなのか?」

取り敢えずセシリーの鼻血を拭き取り、ティッシュで栓をする。床に寝かせておくわけにもいかないの、ベッドル部屋へと運んだ。

幸せそうに気絶しているが：本当に大丈夫だろうか?なんか気絶したまま昇天してしまいそうだけど。…いあ…え、いや、なんか本当に!?天使^{セシリー}から天使が出てるー!?!」

「お姉ちゃん生きて♪死んじややだー♪」とまたも自分なりのシヨタボで元気付けると喝ツ!!と行った具合に天使がセシリーの中へと勢い良く戻つていった。目は覚めなかつたが。

……この声はセシリーの生殺与奪を握っているというのか…?…少し高めの声で生まれてきたことに感謝すればいいのか憎めばいいのかよく分からないな…。

取り敢えず、あの散らばった唐揚げを片付けに行くことに決めた。セシリー程熱心とはいかないが私もアクシズ教徒、教会を掃除しない

といけないだろう。

その場へ向かうと教会に唐揚げがぶちまけられているという罰当たりな光景が見えてくる。

折角の妻の手料理なので、汚いとか聖職者がやる行為じゃないとか言われようと地面に落ちてる物も食べることにした。

それにここは教会だ：セシリーが運営しているとはいえ何かしら不思議パワーで綺麗になっていたり……しなかったな。ちよつと汚れてますね。はい。ちよつと味が落ちるが地面に触れていた時よりはマシだと思うので水で洗ってから食べることにする。

「んぐんぐ……あ、美味しい」

顔やエプロンに炭をつけていて少し心配だったが、全然問題なかった。普通に美味しい唐揚げだった。逆になんでこれを作るのに炭の汚れが出来たのか気になるけど、まあそれは後で聞くとしよう。

それからクエスト帰りで一応汗を掻いているので風呂に入ることにした。

仕事した後の風呂は最高だと個人的に思う。

ここにシユワシユワではなく、妻がいてイチヤイチヤ出来たらな：と思ってしまう。新婚でまだアツアツの時期なのだ。それぐらいしただって、バチは当たらないだろう。いや、やはり彼女は聖職者であるからバチが当たるか？いや、そもそも私もクラス的に言えば聖職者なんだが……やっぱり罰当たりか？いやでも、もう壁も超えてしまったし今更……いやでも、アレは彼女が誘ってきたのであって：別に私に罰が下るわけじゃ……それに、アクシズ教に『法に触れないのであれば好きなようにしなさい。一度きりの人生なんだから』という教義があるので問題はないのでは？セクハラも日常茶飯事の様はこの教団にはあるし……待てよ？私は誰に弁解している？

一度思考を止めて、意味もなく上を見上げる。

特になんでもない大理石で出来た天井が広がるだけだった。

今更だけどここの教会にここまでしつかりした浴場があるのは何故だろう？

アクシズと言うほどのだからやっぱり水関連に力を入れている

んだらうか？

後でセシリーに聞いてみよう。

うつかりのぼせそうになったのを回避して浴室から出る。

体がのぼせる直前だったせいも冬特有の寒さを微塵も感じなかった。そのままタオルを一枚だけ巻いて自分の下着を取りに行く途中、なにやらベッドの方が騒がしいことに気づいた。

近づいてみればこんな音がしてきた。

ドタツ！バタツ！バタン！

……この騒がしさはセシリーである事は分かるんだが、一体なんで夜中に？というか、私が色々としている間に起きていたのか。

「セシリー？大丈夫か？」

「あ！？カズトさん！？ちよ、ちよつと待つてください！今ドアを開けないでください！？」

「セシリー？」

そこに先程まで自分が介抱していた美人プリーストはいなかった。

今日の前に居るのは男性の性を引きつける様な扇情的なデザインをしたネグリジエを身につけて目の前にあるYES♡と色付けされた枕を取ろうとしているセシリーであった。……ウチの嫁って可愛すぎると思う。

「え、あつ……その、こ、これはあ……！」

珍しく顔を赤く染めるセシリー。羞恥って言葉は彼女にも存在しづらい。

「今夜は一体ナニをするつもりだったの？セシリー」

「え、えつと、ですね……これはそのう……」

動揺を隠せていないようで、珍しくあたふたし始めるセシリー。

「私を誘ってるの？」

「と、当初の予定ではそのつもりだったんですけど……意外に準備に時

間がかかって…」

「充分だよ。今の姿や、あたふたしてるセシリーを見てたらすつごい可愛いって思ったし、誰にも渡したくないなって思ったよ…私からも…今から、シてもいい？正直、今は…セシリーを愛したくて…抱きしめたくて堪らない」

「うああ…想像していたのと違いますけど、もう、どんとこいです！私だってカズトさんは誰にも渡したくありませんし！今はぎゅーって抱きしめて欲しいです！愛して下さい！いっぱい赤ちゃん作りましょう！」

——その後は…分かるだろうか？

生憎R18展開なんてものはこの小説には無い。制約であるし。

(メタ)

それと、一夜明けて分かったんだけど、セシリーは一度こっち側のペースに持ち込むといつもの調子が出ないからむっちゃ可愛い声を出すようになるよ。暫くはこれで一歩リードしてセシリーをからかえそう (ゲス笑)

悪魔退治と洒落込む

翌日になってみれば、もう昼近くだった。隣にセシリーは居なく、大分自分は熟睡していたらしい。

それにしても、昨日は流石にハツスルし過ぎた。…なんとも言えない雄と雌の匂いが今でも鼻にこびりついている。昨日は…本当にいつまで生きていたんだ？と自分自身とセシリーに疑問を持つ。

だが、その中に性欲ではなく、食欲を誘う様な匂いが鼻腔を刺激し始める。リビングへ向かうとセシリーが朝ごはん（という名の昼ごはん）を作って待っていた。

そのまま席に着き、嫁と一緒に和やかな食事でもしようかと思ったが、食事中に昨日の営みについて感想を述べられた。これには流石に失笑した。

なんでも年下からリードされるのは新感覚で前回とは全く違った快感で気持ち良かったのだとか…：朝からする会話ではないのだが、自分の欲求に正直なアクシズ教では普通の会話なんじゃないか？と思えるようになっていくことに気付き、人としてなんだか何かを失った気がする…。まあ、今日もそんな会話から一日が始まっていく。

次はどんなシチュでやりましょうか！と笑顔で聞いてくるセシリーにまた失笑し、少し考えてから返す。

「私が赤ちゃんの役に徹すれば面白いとは思わないか？所謂赤ちゃんプレイだ。昨日は私が攻めだったし今度は受けでいいよ」

「いいですね！今日やってみましょう！」
私たちは聖職者ではなく生殖者ではないだろうか。それとも性職者？

まあ、朝からする会話ではないのは確かだ。だが、明らかにおかしいと自覚していても『楽しければよからうなのだあ!!』の精神でやっていけばいいと思う。

「あ、そうだ。聞いてくださいよカズトさん。私がまだこの街に来てすぐだった時に面白い子が居たんですよ」

「へえ…どんな子がいたの？」

「私が買い出しのついでに冒険者ギルドになんとなく立ち寄ったら、ギルドの隅に困っていきそうな可愛い美少女が居たんですよ。これは毎日エリス教徒に嫌がらせしていた私へのご褒美だ！って思ってたその子の悩みを聞いてあげたんですよね。勿論、アクシズ教への勧誘も含めて」

「そしたらどうなったの？」

「そしたらその子『アクシズ教に入信したら…私にも友人や仲間が出来ますよね!』って言ったんですよね…いやー、アレはマジの方だったので関わるのをやめましたね。でもその後美少女を勧誘できるチャンス逃しちゃった！ってすっごい後悔したんですよね。あー、また出会えないかなあ」

「それだったら私が探そうか？多分その子ギルドにいたって事は冒険者だろうし」

「本当ですか？ありがとうございます！」

（ギルドでそんな願望抱く美少女って多分いつも隅でトランプしている子だよなあ…）

ピロートークを続けて朝ごはんを食べ終えた後は教会の掃除を行った。

なにせこの教会を運営しているのはセシリー…そしてこの街ではアクシズ教徒が非常に少なくぶっちゃけ掃除している者なんて居ない。私が来てから祭壇があったあのでかい会場と私たちの寝室は掃除し終えたが、それ以外はまだ埃を被っている物置状態だ。

前任の責任者はこの事態に手をこまねいて居たが、セシリーが新任されたので全部押し付けたのだ。流石アクシズ教。例え同教だろうが潔く面倒ごとを押し付ける姿勢に思わず笑ったよ。まあ、その後その前任者の身元を割り出して家に乗り込んで少し抱きしめて（色々と折って）やったが。

セシリーは献身的な姿勢でアクア様の為なら！と言って箒を両手に普通に掃除をしている。その姿は正しく聖女に見えた。

…前任者はこの精神を無くしたんだろうか。

まあ、私もその前任者の事を強く言える訳ではないが…（ただし、強

く暴力は振るえる)。

私は日本では無宗教だった。精々が仏教の慣わしとして死者を弔ったり、一周忌を迎えることにお墓参りをしていただけだった。神も居たら嬉しい程度にしか思っていない。そんな普通の人のだ。

アクア様と言って自分たちの御神体を敬愛しているアクシズ教だが、私はその中でも異端だろう。アクア様といういるかどうかすらも分からない神に未だ半信半疑で信仰出来ていない：なんちゃってアクシズ教徒なのだ。

そんな精神でアクシズ教徒をやっている自分に嫁への罪悪感が酷い。

なんとかして自分の命さえも捧げられる程アクア様を信仰出来ないものかな：それぐらいでやらないと嫁に合わせる顔がなさそうだし。まあ見ちゃうんだけど。

そんな気持ちで使える聖水と腐ってる聖水とただの水を分別して収納または処分している自分に呼び声が掛かった。

「カズトさん！カズトさんはいらっしやいますか!？」

多分この声はスズさんだろう。

こんな昼近くにどうしたんだろうか？そもそもギルドの職員が教会：というより冒険者の元に直々に来るといふ事自体珍しい気がする。

「なんなんですかあなたは！私のカズトさんを気安く名前で呼ぶなんて！は!?!まさか不倫相手!？」

「んな訳ないでしょう!?!私是不倫相手じゃないです！私はギルドの職員のスズという者でして、今日は冒険者であるカズトさんに用があった来たんです！断じて不倫相手なんかではありません!!」

「そんなこと言って私からカズトさんを奪うんでしょう!?!騙されないわよ私は！さあ！さっさと帰ってところてんスライムでも食べて喉を詰まらせて苦しめばいいわ！それかアクシズ教に入信しなさいよ！そしたら一夫多妻だって認めてやらない事もないわ！勿論本妻は私！」

「結構です！なんで私があの人と結婚する事前提なんですか!？」

ギャーギャーと朝っぱらから騒いでいる二人に近寄ると、スズさんが私の存在に気付いたのか顔を明るくした。

「というか、本当にどうしたんだらう。こんな朝に。」

「あーカズトさん、いいところに…貴方の妻が私を不倫相手だとか言うんですけど違いますよね!？」

「うん、違うね。私はセシリー一筋だからスズさんとは飲み仲間になっても恋人はないな」

「…女性の前で随分と失礼な事言いますね。私もそこそこ傷つきますよ。」

「なんだ、面白くないの」

「話を盛り上がらせた方が良かったかな？実は不倫してました、的な」

「やめてください。…ハア…なんで呼びにきただけなのにこんなに疲れるんですかね…」

スズさんが少し項垂れる。

まあ、一般人からしたら私たちアクシズ教徒の相手をするのは相当体力を使うんだらう。

私は楽しいと感じるので余り苦にはならないのだが。

「そういうえば、スズさんがここに来るなんて珍しいね。どうしたの?」「やつとですか。やつと説明できますよ!全く…実はですね。貴方は最近王都から帰ってきたので知らないでしょうが、今この街の近辺の森で上位の悪魔がいる事が確認されていますよ。そこで討伐隊を結成したいのですが何しろ駆け出し冒険者しか居ないこの街では多勢に無勢です。そこで悪魔に対して絶大な力を誇るアークプリーストである貴方の参加が必要不可欠なんです。この街で貴方並みのアークプリーストはもう一人居るはずなんです…未だ見つかっておりません。そこで最近王都から帰ってきたという貴方の元へ伺ったというわけです」

「あー…そう言えば昨日冒険者達が悪魔の所為で稼ぎ場を失っちゃった、とかなんとか言っていましたね。構わずに白狼の群れ討伐に行っちゃいましたけど」

「……貴方だけです。駆け出しの街で高難易度クエストをそう易々と受けられるのは…」

アレで高難易度だったのかあ…ちよつと拍子抜けだったなあ。いや、駆け出しの高難易度なんだから順当というなら順当か、王都の高難易度と難易度を比べるのは酷だ。あそこは魔王と戦う最前線の国家だから仕方のない。

と、そこまで考えたところでセシリーに肩を叩かれた。

「カズトさん！今こそアクセルの街を脅かしているクソ悪魔を倒す時ですよ！まだ教えてるのを忘れていましたいませんでしたがアクシズ教の教義の中に『悪魔殺すべし』という鉄の掟があります！私は簡単な回復魔法しか使えませんが、今回は討伐隊には入れませんが、これで貴方が街の人を困らせているというクソ悪魔を討伐すればアクシズ教のイメージがアップして絶対に入信者が増えます！アクア様の教えに従いかつ、入信者が増えるとなるんじゃないや一石二鳥ですよ！頑張ってください！」

セシリーが自分に期待を込めた目で見てくる。

嫁から期待されるといふのは私からしたら最高のモチベーションだ。それに頑張ってくださいなんて言われたら、やるしかないだろう。

「ちよつと世界中の悪魔を殺してくる」

「話が飛躍し過ぎてません!?それは後でいくらでもしていいので今は街の森にいる悪魔をお願いします！」

ここでスズは思った。

ああ、この人相当な嫁バカなんだなつと。

その後、嫁からのエールでやる気という殺る気が満ちた私はスズさんに連れられるがままギルドに向かい無駄にでかい扉を開け

バンツ!!

——また、壊してしまった。…力の制御を怠っていたらしい。

ギリギリと首を動かすとニッコリ笑顔のスズさんが居て……

「スズさんも結構可愛い…:というか美人の部類に入ると思うんだ…:ホ

ラ、そのショートヘアめつちや似合ってるし、目もかなりキツイですけどそれがなんか仕事できる女みたいなの……」

「お世辞はいいです。弁償してください。そしてこれを修繕するのにどれだけ手続きが大変かわかりますか？」

「……イエスマム」

まあ、金には余裕があるから良いんだけどさ！

パンツ！

……痛い……セシリーのビンタ食らった並みに痛い……。

◇

ここでカズトがギルドに来るまでに起こったギルドでの出来事を記そう。

まず、最初に抗議の声を上げたのは血の気の多い冒険者からだ。た。

このままでは俺たちの生活は苦しくなるだけだぞ！あつちが来ないんだつたら俺たちの方から仕掛けるべきだ！相手が悪魔だかなんだかしらねえがガンガンいこうぜ！

と……その声は波紋の様に広がり、冒険者達は次々に悪魔の討伐をギルドへと要請した。

ギルドの職員はその勢いを止められず討伐隊を結成することを決定してしまった。

そして、討伐隊を組む際の隊列をどうするか……と話を振り始めた所、真っ先に手を上げた者がいた。

「僕が最前列の隊に行こう」

一番早く名乗りを上げたのは巷で噂の神すら滅ぼす魔剣を持つ勇者だった。

一部はしやしやり出てくんなど反発した者達もいたが、見事にボコボコにされて皆はその青年の力を認めざるをえなかった。

そのままアクセルの街でも有数な力を持つパーティーの多くが最前列へ並べられ、一部の有力パーティは不意打ちに備えて力のもとない者たちと共に最後尾へと回された。魔法職の者や支援職の者は中央に配属され、青年を筆頭に大方の陣形は整ってきた

しかし、ここで問題がある。

いくら神殺しの魔剣を持っているからといってここは駆け出しの街…本当に悪魔を滅する力はあるのか?と。

要は火力不足だ。今回は紅魔族の二人の魔法使いがいると言ってもどちらか悪評と年齢が原因であり戦力には考えられていない。

それでいざこざがあったりしたがここでは割愛しよう。

そして、対悪魔のエキスパートであるプリーストにその不足している火力を補おうとしたが、相手は上級悪魔。並みのプリーストでは歯が立たずアークプリーストレベルでないと張り合えないだろう。

「この街にアークプリーストなんて居たか?」

「そもそもプリースト職自体なり手がすくねえんだろ?」

「この街にそんな奴いるわけねえだろ」

冒険者たちは早速困ったことになった。が、ここで一部の冒険者達とその相手をいつもしていた受付嬢は思い出す。

あのやべーやつがいるじゃないかと。

「あ、いるじゃないですか! 私たちの街についてこないだアークプリーストになった2人が!」

『あ』

いつもあのやべーやつへの対応している受付嬢が言ったことにより、忘れていた冒険者達も思い出した様だ。一部はあのやべーやつを、また一部の冒険者は水色の髪をした発言が残念な少女を。

しかし、本当に何も知らない者達はまだそれが一体誰なのか分からずに疑問符を浮かべている。

そこで知らない者の一人、レックスが声を上げる。

「つったって『ついてこないだ』なんだろう? 本当に使えんのか?」

当然の意見だろう。

ここは駆け出し、駆け出しだからといってレベルが上がりやすいと言ってもプリースト職はアンデッドや悪魔などの特異なモンスターを倒すのがレベル上げのメインな為一番レベル上げにくい。『ついてこないだ』が、どれ程前の事なのかは分からないが、アークプリースト

になれる程の素質があるものがそんな短期間でレベルが上がっているとは思えない。スキルもステータスも見劣りするだろう。

「大丈夫ですー片方の方は一部のステータスは低いですが、どちらもずば抜けて高いステータスを持っていますーしかも、既にどちらも全てのスキルを取っている超優秀なアークプリーストなんです！更に一人は既に王都で活躍している方です！」

受付嬢の声を聞いて冒険者達の空気が変わった。全員が希望を見出したかの様に目が明るくなる。

「マジかよーそんな人達がいるんだっいたらいけるんじゃないか!？」

「一体どんな人たちなんだよ!？」

「それが…お二人ともアクシズ教徒なんです」

また受付嬢の声を聞いて冒険者の空気が変わった。

さつきとは違って目に曇りができ、皆眉を顰める。

「え…」

「…よりによってなんでアクシズ教徒なんだ…」

あの自由奔放で宗教勧誘に詐欺紛いな事をしよつちゆうして、実際に警察のお世話になってる者もしばしばいるあのアクシズ教…力になるのは確かなのは分かったが…組むかどうかは別になってしまふ。

「二人の方は女性で、もう一人は男性です。女性の方の行方は現在分かっておりますが、男性の方なら分かっています。少し前までは王都に居ましたが今は帰省しているので、恐らくアクシズ教会の方に居られるんじゃないかと…」

居る場所を聞いたって誰が喜んで行くものか…皆に反応は無く、誰が行くのかと視線を飛ばし合っている。

あの男と女性を知っている者達もあまり関わり合いを持ちたくない様で無視を決め込んでしまっていた。これではいつになっても討伐隊が結成されないのではないかと徐々に不安が高まっていた…その時。

「ねえ、貴方が行ったら?」

「え、私?」

他の受付嬢がスズが行けばいいのでは？と提案してきた。

すっかりと静まり返っていたギルドにその小声は響くもので、皆がスズを見てきた。

「ええ……」

誰か救いはないものかと仕事仲間を見れば全員顔を背けている。

おい待て、私があんた達の仕事を受け持ったこともあっただろう。その恩は返さなくていいのか!?!と視線を送れば、冷や汗をかいたものが数名、顔を更に背けたのが数名いた。

……この世界って本当に腐れがいいと思う。

と半ばヤケクソで訪れたのが今朝のスズであった。

◇

カズトが来たからといってギルド内は歓声に包まれるでもなく、静かな状態を保っていた。

苦い顔をしている者達がちらほらといる。それもこれもカズトがアクシズ教だという事実もそうだが、扉を壊したことで受付嬢に殴られた光景を見れば本当に頼りになるのか不安になってしまう。

そう思いを寄せている冒険者達を他所に問題のカズトは殴られた頬をさすりながら冒険者達のグループに近づき、挨拶を始めていた。

「やあやあ皆さん。揃いも揃って元気かな？私はカズトという冒険者になってからという意味でも、アクシズ教徒になってからという意味でも日が浅い半端者だよ。まあ、王都で色々やっちゃって今は出禁にされてるけど、よろしくね」

おい待て今なんだった？

そう問いかけようとする者が何人か居たが、誰も問いかけることがなかったので質問するのをやめた。同調意識とは怖いものである。

「君が噂のアークプリーストだね。今回はこの悪魔討伐に参加してくれてありがとう。僕は御剣響夜、気軽にキョウヤと言ってくれて構わない。クラスはソードマスターをやっている。よろしく」

「ああキョウヤくん、よろしく」

期待の魔剣の勇者と今回の最重要人物が挨拶を交わすと、ギルド職

員から今回の悪魔討伐の詳細が語られ、遂に冒険者達は悪魔討伐へ向かった。

今までの特異な戦績と、そのずば抜けたステータスから、当たり前のように最前列へと並べられているカズトは、悪魔という存在はどういう生態をしているのだろうか？と少し興味を抱いていた。

前世の世界では絶対に居ないと決められたという訳ではないが、それでも居ないという認識が世間一般であり、そんな空想上の生物が当たり前のように屯しているこの世界で出会えることが確定し、子供のようにワクワクしているのだ。

セシリーが…というよりは私が今信仰している女神アクアは悪魔ガチアンチの様だが、正直悪魔相手に話してみたい欲求があった。

春になつてもまだ地味に寒さが残る森の中で、誰ともグループを組むこともなく、ただ一人だけポツンと最前線グループの中央に配属されたカズトは、一人でそんな思考を抱いていた。緊張感のないその様子に周りの冒険者は注意しようとするもまだアクシズ教徒という事で関わりたくないのか距離を置いている。

「モンスターが出たぞー！」

すると、突然後ろから声がした。

振り返ればどこからともなく現れたモンスター達、しかしどれもこの街で初心者が相手をする様な雑魚ばかりである。魔剣の勇者を筆頭に前衛職の冒険者や魔法使い達が一齐にモンスター達を屠っていく…が、しかし…

「クソっ！なんなんだよこの大量の雑魚はよお！」

「斬っても斬ってもキリがねえぞ！」

いかにせん数が多かった。

次第に木からスライムが落ちてきて窒息死しかけている冒険者も

出る始末。

『ライトニング』！『ブレードオブウィンド』！』

魔法職の中でも一際目立つ中級魔法を放っているのは誰だろうか。目を向けて見ればそこには小さな女の子が2人…しかも瞳が赤い…ああ、あれが世に言う魔法のエキスパートの紅魔族か。だとすると…彼女達がウチのギルドで有名な紅魔族達か。

その子も必死に魔法を撃ってモンスター達を減らしていくが本当にキリがない。

『おい！そのプリースト！早くこつちを回復してくれ！敵の数が多すぎる！それか強化魔法をかけてくれよ！』

周りばかり見ていて何も行動していないカズトを一人の冒険者が叱責してきた。これは失敬とカズトは急いで魔法を詠唱する。

『ヒール』！『パワー』！『プロテクション』！『スピーダー』！…どうかな？』

『うおおっ!?これがアークプリーストの力ってやつか?信じられねえぐらい力が湧いてきやがる!』

『おい！それこつちにも掛けてくれ!』

『オーケー。』『ヒール』！『パワー』！『プロテクション』！『スピーダー』！』

一部の冒険者達の力が大幅に上がり大量にいたモンスター達が駆逐されていく。

実際この世界でまともに人に魔法を使うのは初だったりして、あ、成功した！とカズトは心の中で喜んでたりする。

支援職の名の通り味方を一通り強化し終えて、傷をある程度負った味方に回復を施す。

ああ、今なんかパーティらしい事してるなあ…とカズトが仲間がいる時の楽しさを感じていると…。

『グウツ!』

『キョウヤ!』

突然魔剣の勇者がぶっ飛ばされてきた。

その方向に目を向ければ黒い巨大な怪物…漆黒の毛皮というべき

かやけに光沢のあるボディをしている見た目が完全に生物と似通ったナニカにしか見えない悪魔がいた。

「よお。駆け出しの冒険者ども。俺様の名はホースト。邪神ウォルバク様の片腕、上位悪魔のホーストだ。早速ですまねえが、その魔剣の勇者と：そこのアークプリーストは死んでもらうぜ」

随分とカッコいい名乗りをあげるじゃないか：と心の中で思っていると、何故か私とキョウヤが死刑宣告をされた。本当にどうしてだ。

「悪魔か!？」

「遂に正体を現しやがったな！上級悪魔だかなんだか知らねえが、今の俺たちにはアークプリースト様の加護がついてる！野郎どもいくぞー!!」

『おおおお!!』

勇気か蛮勇かは分からないが冒険者達はそのまま悪魔に向かって駆け出していった。

：…とかいつから君たちは私を様付けしたんだ？

「ハア：みすみすチャンスを逃すような真似しやがってよお」

それを悪魔は駆け出していった冒険者達を憐れの意味を持ってか見つめていた。相当力に自信があるようだ。まあ、私も相当力には自信があるのだが：この世界の悪魔がどんなものなのかは知らない。ひよつとしたら私よりも圧倒的に強い可能性だってあるのだ：まあ、その場合相手は悪魔ではなく神に近い邪神だと私は思っているのだが：…だつてあの方を越える実力つて早々にないぞ？

「うおらっ!!」

「ッ!?!アークプリーストの強化魔法のせいか？俺様の身体に傷を負わせやがった…!」

大剣を持った冒険者が悪魔に一太刀入れた。傲慢さ故かその攻撃を受け入れた悪魔に傷が付く。だが、二撃目を食らう傲慢さは無かったのか悪魔は一度飛び退き、空中で魔法の詠唱を始めた。どうやら今の一撃で大体の強化具合を察した様である：普通に考えたらこの街の冒険者が相手するようなやつじゃないな。

「チツ！あまり魔力は使いたくねえが仕方ねえ！『インフェルノ』!」

「やべえ！離れる！」

冒険者達が一度引こうとするが少し遅かった何人かの冒険者達が巻き込まれて火だるまになっていく。

「熱い熱い熱い！助けてくれえ!!」

「ああああああ!!」

「おい！まずいぞ！早く誰か回復魔法を掛けてくれ!?それかポーションでもいい！持ってきてくれ！」

『クリエイトウオーター』！『ヒール』！……大丈夫かい？」

「クツ：すまねえ！助かった！」

「こつちにも頼む！」

「了解！『クリエイトウオーター』！『ヒール』！」

火傷を負った冒険者達が雪崩のようにこつちに駆け寄ってくる。範囲回復でもしたいが、この世界にはそういう味方全員にバフ掛けするような魔法はないらしい。ドラクエを見習えと言いたい。

また果敢に突っ込んでいく冒険者達だがそろそろ強化魔法が切れてきたのか、先ほどよりも動きのキレが悪い気がする。いや、回ってきている火も問題なんだろう。今は魔法職の人たちが必死に消火活動を行なっている。

対照的に悪魔は無尽蔵な魔力でも持つてるのか上級魔法を行使し続けて先ほどよりもアグレッシブに動いている気がする……。それに、冒険者達を殴り飛ばしたり翼でぶっ飛ばしたりと隙もない。

魔法使いの人たちが連続して魔法を詠唱するが、悪魔に大してダメージを負わせていないようだ。しかも悪魔は出の早い『ライトニング』という魔法をも見切ってるのか躲している事が多い。……ほぼ光速に動いている雷を躲すとか凄いな……私もいえた事では無いけど。

このままのペースではこちらが魔力切れや体力切れで悪魔の方が有利になっていく一方で、私の魔力は問題ないとしてもいつか私の回復が間に合わなくなってしまうだろう。滑舌的な意味で。

正に乱戦と言われる状況の中で、遂に冒険者達の中で気絶するものが出始めた。

傷を回復しているとはいえ残った痛みは消えない。

その痛みには耐え切れなくなったのか頭がショートしたんだろう。

……ていうか未だにあの魔剣の勇者が目覚めないのは何故だ……私が既に回復してあるはずだが……。

……ちよつとまずいな。

未だに私の回復で死者は出ていないが、重傷者は多い。……精神的な方で。

さっきまでの獰猛さを失ったのか冒険者達の勢いが弱くなっている。

痛みによる恐怖からだろう……。

私もその恐怖は分かる。痛みのベクトルは違うがドラゴンのブレスの中をヒールを何回もかけながら無理やり突っ切るという生き地獄を体験した事があるからな……あんなものは二度と味わいたくない。

「ああくそ！次から次へと復活しやがって！あのアークプリーストか！」

「まずいぞ！今あの人やられたら戦線を維持できなくなる！なんとかしてでも守るんだ！」

他のプリーストも必死に回復している筈なんだが何故だか私に目処が立つ。まあ、いい、本来なら私は魔剣の勇者と同じで攻撃役のはずだったのだ。ずっと支援役に徹していたが、死者が出ることはまずい。いや死んだとしても必ず蘇らせてみせるが……そういう問題でもない。ここは早めに決着をつけるために1発キツイやつを……。

『セイクリッド・エクソシ……』

「真打ち登場！」

「えっ!?ちよつとめぐみん!?今出るタイミングだった!?明らかにあの人が何かしようとしてたけど!」

「なんですかゆんゆん！人のカッコいい登場シーンを邪魔しないで貰いたいのですが！」

「いや完全にタイミング間違ってたからね!」

「……ああ、君たちは後ろの方でなんかやってた紅魔族の子か」

「なんだあ？次は紅魔族か？」

突如として現れ急に姉妹漫才でも始めたのかイチャコラとしてい

る二人に私と悪魔の視線がそちらへ行く。

その隙を見てか冒険者達も後退して回復し始めた。

「おい馬鹿野郎?!なんで突っ走っていったんだよ口だけ魔導師!」

「いい加減あなたにも分かせてあげますよ…!最強の攻撃魔法!爆裂魔法の威力を!」

それを追ってきてか、一つの冒険者パーティが来た。

全員息遣いが荒い。多分モンスターを倒しながらここに来た最後に配属されたパーティだろう。

「どうかいい加減に…とはどういう事だろうか?二人の間に一体何があつたんだ?」

いや、明らかに少女が口だけ魔導師と呼ばれているのが理由なんだろうが、一体なぜ口だけ魔導師という称号を彼女は貰ったのだろうか?

「そのアークプリーストの方!私が魔法の詠唱を完了するまでその悪魔を抑えつけておいてください!」

「なんて事頼んでるのめぐみん?!いくらなんでもそれは無茶よ!めぐみんだって遠くから見ただしでしょう!あの人の色んな人に回復魔法や強化魔法をかけてるところ!さらに無茶させようっていうの!」

「あの人ならきつとやれます!ゆんゆんも見たでしょう!昨日、あの人一人で白狼の群れを相手にしていたところを!」

「やめて!!アレを思い出させないで!」

見られていたのか…アレを。一体何処から……。

この子の怖がりようから後半戦の時(能力を使って一瞬で死なせた時)ではない事は分かる、ある意味不気味な光景ではあるが、あの狼達の身体を千切るか捻るか握りつぶすしかやってなかった前半戦の時の方がヤバかったからな…絵面的に。

周りの冒険者達がギョツとした目で私を見てくる。

あの白狼の群れを一人で相手にするなんて…とか思ってるのだろうか。

まあ、その視線には王都で慣れてる。今更気にはしないが、今はその視線の方向を悪魔に向けてほしいと私は思うよ。

「まあ、了解したよ」

「お前馬鹿か!? 悪魔とタイマン張るプリーストが何処にいるんだよ!?」

「ここにいるよ。まあ……手助けはしなくて大丈夫だと思うよ。私、結構強い（人の能力や身体貰ってる）から」

そう言い終わると同時に悪魔に向かって疾走する。握りこぶしを作って聖なる力…みたいなのを腕に溜めてそれをホーストに叩き込んだ。名付けるとしたら『正義の鉄拳』…これ本当は受け止める技なんだけどさ。

全員があっけらかんとした表情で目の前を見やる。

何か秘策を使おうとしたのか魔法を詠唱し始めていた紅魔の子も含めて。

「…ゴバツア!」

「私はアクシズ教のアークプリーストだよ。本来ならもっと早めに君と闘いたかったんだけど、せっかく私の仲間が私に施しを求めてきたからそつちを優先してたんだ。ごめんね」

ホーストが血に似た何かを吐き出した。

私が拳を振り切ると悪魔は近くの木へと吹っ飛んでいく。

激突した木をへし折つてもなお止まらずに何本かの木を木片と変えながら吹っ飛んでいったが、やがて減速し止まると次はその地点から大きな音と土煙、そしてそこから発せられた地面の振動と共にこちらに急接近してきた。

「ってんめえ!? やっぱり『バーサーカープリースト』か!! 早めに殺しくべきだった!」

「ねえ、気になってたんだけど私って他の人からなんて言われてるの? そして君たち悪魔からはどんな風に思われてるの?」

ガシィッ! と私と悪魔は掴み合いを始める。相手の極太の腕と細い人間の腕が掴み合いを行うという光景は圧倒的に悪魔側の方が有利に見えるが力の差は無いように均衡を保っていた。

「し、信じらんねえ…あの悪魔と力の張り合いしてやがる…」

「なあ最初からアイツ一人でやれば良かったんじゃない?」

『おいやめろ』

他の冒険者達の存在意義が問われたが、そんなのさも知らんとばかりにカズトとホーストの戦闘は行われる。

ジリジリと力がせめぎ合う中、先に均衡を破ったのはホーストだった。ホーストがカズトを持ち上げたのだ。力の踏ん張りどころが無くなったカズトは何の抵抗もなく地面に叩き込まれる。

ドゴオン!!

「イツツ……!!ア”ッ”ッ!!」

背中を思いつき叩きつけられて空気が一気に抜ける。

痛みによって横隔膜が痙攣したのか息が上手くできない……!

ヤバイな……生命力はともかく防御力は通常の間人だから痛い痛い!

痛みに顔を歪ませてると急に目の前が暗くなつ……

ドゴオ!!!

悪魔は両手を組んでさらなる追撃を加えてきた。

その威力はとんでもないものでよりクレーターがより深いものになる程であり、恐らく私の体は手と腕が完全に伸びきり、あのアメリカ最強に全身全霊の力で殴られた某大統領の様になっている事だろう……。何故こうも他人目線なんだろうな自分は。ああ……とんでもなく痛い。骨格がいかれたかと思うぐらい痛い。というかイカレただろうな。

「てめえ人間か?」

「に……ッ!あああ”っ!!……ん……ゲホッ……げんだよ!」

「嘘言えよ」

正直舐めてた。……やはり何処の世界にも最強なんて無かったらしい。

私は今まで身体能力という馬鹿でかいステータスと純化という能力に頼りすぎていた。

今私にはコイツに対抗できるほどの戦闘経験が無さすぎる。

だが、勝てない相手じゃない。力は私の方が圧倒的に上だ。あの掴み合いで分かった。やはりステータスチートというものは偉大だ。

経験なんてものを容易く覆すのだから……まあ、油断したらあっさり死ぬと思うけど。

そのまま仰向けになってるわけにもいかず更なる追撃が加えられる前に激しい痛みで動くことを拒否している身体の言う事を無視して飛び退いた。勿論自分にヒールを掛けながら。

もう一度悪魔を見やると悪魔には小さな傷みみたいなものが結構あった。冒険者たちが頑張ったんだろう。でもどれも致命傷にはなつてないのが惜しいところだ。

『セイクリッド・エクソシズム』！

「うおっと。あぶねえなあ」

スペシウム光線のポーズをして対魔特攻魔法を放つ。初めて使ったけどビーム系の技で合つてたらしい。撃った本人が言うのも何だけどなぜ私はスペシウム光線のポーズをしたんだろう。というかせつかくなんだから避けないですよ。まあ亜光速の雷魔法避けたんだから、これくらい避けるか。

空に飛び上がったホーストは魔法の詠唱を始めた。

「お返しだぜ。『カースド・ライトニング』！」

「危なっ」

黒い稲妻が迫って来たのでそれを避ける。これも自分の身体能力頼りになってしまいが、稲妻を見てから避けるなんて芸当が出来るの、この世界に何人いるんだろう。目の前のホーストという悪魔もその一人だが。

「……もう一度聞くが、お前本当に人間か？」

「私は少し強い身体を持った人間だよ……ていうか、君に言われたくない……ねえっつっ!!」

「普通の人間がここまで飛んでくるかよ!!」

そのまま空中戦にでも行こうと思つたが、相手は翼のある上位悪魔、空中戦はどちらが有利なのか明白だ。1発だけ殴つたが、その腕は捕まれてまた地面に落とされる。

ドゴオ!!

本当に容赦ない：また空気が体全体から抜けたのか音にも聞けない振動が喉を過ぎる。息ができればどの痛みが背中を中心に体を伝い、思う：ドラゴンボールのキャラはいつもこんな思いをしていたのだろうか：頭おかしいんじゃないの：私だったらもう痛みにも絶叫を上げて泣き出したい。

だが、そうはいってはいけない。私には大事な妻がいる。彼女とは約束：と呼べるものでもないが、悪魔を倒してくると言ったのだ。立ち上がらなければいけない。

また、立ち上がり両足に力を込める。そして溜めた力を一気に解放して：跳ぶっ！

「オラア!!」

「懲りねえっなあっ!!」

今度は完全に見切られたのか避けられて同じように地面に叩きつけられる。

……どうしようか、ツツ……痛みも酷い。……一瞬だけこれが嫌になった。駄目だ。嫌とは思ってはいけない。思っちゃいけない。彼女に頼まれたんだから。

『「クリームゾン・レーザー」!」

痛みの硬直で動けない私に容赦なく追撃の魔力のこもった赤い熱戦が放たれた。

「あああ!!…アツツ!」

「やつともろに入ったぜ」

『「ヒー……うぐっ!」

「回復させる暇を与える馬鹿がどこにいると思う?」

今度は私が腹パンされた。

地面に対して仰向けになっていた状態なので更に地面のクレターは轟音と共に広がる。

コイツ本当に見た目通りの筋肉マンだな……。

私もおんなじことは出来るんだけどさ……今はそれすらも出来ないほど痛みが私を蝕む。ドラゴンの時で痛みにも慣れた筈なんだけどな

…そうではなかった様だ。

本当ならコイツも死穢があるから純化すれば死ぬはずんだけど…今回はあの紅魔の子が面白いことをしてくれるらしいので、お預けにしてたけど、もうやっちゃっていいかな…正直…そろそろ私の精神が肉体より先に崩壊しかけてる。

「アークプリーストの方！聞こえてますか！準備が整いましたよ！後はその悪魔をなんとかしてその場から動けなくさせてください！」
「えっ!?あの人今かなり不味い状況だけど!?!」

つと…どうやら準備が終わったらしい。気が変わらないウチでよかったです。

とうか、待った甲斐がありそうだ。何故なら……

「っ!?マジかよ…!」

ホーストが向いた方向に目を動かせばそこには荒れ狂うような魔力の奔流と、漏れ出た力の残穢がスパークしている。まるで主人公が覚醒する直前のような雰囲気を持った紅魔の子であった。…何アレすっごつ。

「ありや不味いな…!」

悪魔は攻撃の矛先を紅魔の子に決めたらしい。

翼をはためかせて紅魔の子に急接近をする。

「行かせるかよ!?!」

「俺たちのことを忘れんなよ!」

その道中に冒険者が立ちほだかった。

回復をし終えたらしく、正に今が正念場というところだろう。

「あの人が稼いでくれた時間を無駄にすんじゃねえぞ!」

『おう!!』

冒険者達が自分たちを鼓舞して悪魔に向かって突っ走っていく。魔法職の人たちも魔法の詠唱を始める。地面には大量の飲みきったポーションがあり、おそらく魔力を回復したり魔法攻撃力アップのポーションでも飲んだんだろう。

そういえば、先ほどの悪魔の上級魔法で燃え広がっていた火は完全に消化できたらしい。あたりには煤だらけで黒くなった木ばかりだ。

…よくあの戦闘で私の服に引火しなかったな。

「邪魔だどけえ!!」

しかし…：…憐れかな冒険者達、手負いだとしても手負いのモンスターというのが一番危険だった。しかも、さっきまでの冒険者達 vs ホーストの戦闘は私の強化魔法がかかっていたからこそギリギリ張り合えていたが、正直言って駆け出しの冒険者達では挑戦権すら得られていなかったんだろう。悪魔はただ高速で移動して体当たりしているだけなのに面白いくらい冒険者達が吹っ飛ぶ。さっき紅魔の子の後ろにいたレックスというパーティが少し粘ったがやはり火力が足りない。その火力を補うように魔剣の勇者がやっとな復活したが、その勇者も慢心を無くした悪魔には厳しかったらしい。また簡単に吹っ飛ばされてしまった…：…といっても今度は置き土産をした様で、ホーストの両翼は完全に根元から切られていた。

しかも、体当たりというだけでも冒険者達の鎧や骨は折れたらしい。冒険者達は全員というわけではないが痛みで蹲ってしまったというか中にはたったの1発でノックダウンしている者達が居る。

もし、私が最初に強化魔法をかけていなかったらすぐにこうなっていたんだらうか。

「…ツツ…：…ハア…：…『ヒール』！『ヒール』！『ヒール』！ああ！
全体回復魔法とかないのかなこの世界！」

やっとな痛みの麻痺から解放された私は自分と冒険者達に回復魔法を掛けながら、全速力でホーストを追いかける。

「ちよちよちよ!?!やばいです!さっきまで最高に良いシチュエーションだったのに一気にピンチですよ!?!」

「めぐみんには手を出させないからね!!…：…というかめぐみんはこんな時くらいちゃんとしてよ!?!」

「ここまで来りやお前だってその魔法撃てねえだろ?…：…ん?お前のその匂い…ウォルバク様の匂いだ…：…なんでお前から…：『ライトニング』!…：…ツテエなあ…：」

ワンドを握りしめた紅魔の子2が、悪魔が話していた途中に雷魔法

を展開させた。中々度胸あるなあの子。

あれ？というか今日の朝セシリーが話していた面白い子ってこの子じゃないか？この子って確かいつもギルドの隅でトランプをやっている魔法使いの子じゃ……。

「ったく、小娘共がよお……」

「まだよっ！『ファイヤー……』君たちのその勇気ってすごい大事だと思うよ」

なんだか臭いセリフを吐いて少女たちを守るようにして前に立つ。

「バーサーカープリースト!?まだ死んでねえのか!」

「紅魔の子!準備はいいんだね!」

「はい!ですが、そろそろ発動しないと暴発しちやいそうなんです……:というか今かなりやばいです!ここまで長く溜めたことなんてありません!早く悪魔を私が見える範囲で遠い所へ!」

「オーケー……」

ガシッ

「クソッ!何する気だ!」

「ちよつとランデブーに行こうじゃないか。二人きりで」

「うおっ!」

自分が出来る最高速度で悪魔を抱きしめて、走り出す、一瞬のうちに紅魔の子達が遠くなった。そこで私は今まで出してきた中で一番大きな声で叫んだ。

「今だ!!」

「道連れにする気か!!」

「だから言っただじゃないかランデブーに行こうってツツ!!」

「ツツ!!?ってんめえ……:……:ハッ!!だが、残念だったな!俺たち悪魔には残機がある!例えお前が死のうが俺はまだ生きてるんだよ!」

ホーストを締め上げると悪魔の体にヒビが入る。やはりこの体の真骨頂は抱擁力にあると思う。:抱かれてみたいとは私自身思わないが。

ホーストは最後の最後に驚くべき悪魔の特性を言ってくれたが、別にいいだろう。

何も私もここで死ぬつもりは一切無いし、セシリーいるし。

「いいんですか!!?」

「構わない!!」

「そんな!?他に方法はな……」あ、ちよつ……もうやばいです!そこまで来てます!ああああああ!!!『エクスプロージョン』!!!」

「ああああああああ!!!何してんのよおおお!!?」

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

瞬間、私と悪魔はとんでもない魔力の爆発と熱に包まれた。

ドラゴンのブレスよりもやばくないかなコレ……つてかヤバイな痛すぎるってレベルじゃないぞ……自分の有り余る生命力でいけるかなって思ってたけど……予想以上にコレやばい奴だった!!

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!

アツツツツツツ……!!!

◇
暴力的な魔力がとてつもない爆発を轟音と風圧と共に引き起こした。

その威力は人類最大の威力に相応しい程で、ここからでも爆発の全貌は見えないほどだった。

その爆発の煙もやがて消える。

「ねえ、めぐみん……あの人……大丈夫かな……」

ゆんゆんからあの人の安否を聞かれた。

だけど、それは分からない。

爆裂魔法を放った時に着弾地点からの感触が伝わってくる。……今の爆裂魔法では2つの大きな感触があった。あの人は上位悪魔とも渡りあえた——味方で言うのも失礼だが——化け物だと私は思っている。生きているんじゃないかと期待を持ちたいが、あの人もかなり悪魔に痛めつけられて疲労していたように見えた。大丈夫だと断定は出来ない。

……最初にあの人を見たのは本当に偶然だった。

その当時、遂にお金を使い切ってしまった私は昼に私の宿に勝手に

上がり込んでくるあのお姉さんにお金を恵んでもらおうとも考えた
が、まだやれると信じきっていたので、ギルドで簡単な依頼はないか
と職員の人に聞いてみた。

そして紹介されたのは採取クエスト…ポーション作成に必要な植
物の採取だった。近くには白狼の群れがいるが、襲つても特にメリツ
トのない者は襲わない賢い知恵を持っているらしく、なるべく荷物を
少なくすれば襲われる事はないと伝えられた。

それでも不安だったには不安だったので、癪だが…色々そこじつけ
てゆんゆんにもクエストの同行を願ってしまった…。

そこで、依頼された植物の群生地に行ったところ。あの人を見た。
最初は目を疑った。明らかに聖職者の格好をした人が一人で白狼
の群れと対峙しているのだから。

そして次に起こったことも劇的だった…アレは二度と思い出し
たくない。

聖職者とは思えないほど残酷な殺し方をするあの人に…ただただ
恐怖した。

その後はゆんゆんと一緒に情けなくも叫びながら逃げてしまった
のを覚えている…。もう街にいる飼いや野良犬の事をまともに
見れない…見てしまうとあの光景がフラッシュバックしてくるのだ。

あの後、夕食を食べるお金もない私はあのお姉さんに頼み込んで夕
食を作ってもらった…途中…買ってきてくれた豚肉が爆発して真っ
黒焦げになってしまったが…唐揚げで手を打ってくれた。

少し話が逸れてしまった。

私たちは急いであの人の安否と悪魔の討伐を確認しに行った。魔
法を撃った私も当然向かった。…歩くことすらままならないのでゆ
んゆんにおんぶされるといふ少し恥ずかしい状況だが、そうも言っ
られない。

「お前、口だけ魔道士じゃなかったんだな…」

途中レックスが私にそんな事を言ってくる。

「ふふん！そうでしょう？今度からは私のことを大魔導士めぐみん様

と言つてもいいんですよ?」

「誰が言うか!…つて言いたいとこだが流石にアレを見せられちゃあなあ…」

あのムカつくレックスが私の事を多少なりとも褒めようとしてくる事に若干頬が吊り上がった。

「レックスさん。そんな事言わないでいいですよ。今はそれよりもあの人の安否を…つてちよ、何するのよめぐみん!? やめて! 髪引つ張らないで!」

折角いい気分になるチャンスだったのに、ゆんゆんに潰されたので腹いせに髪を引つ張つてやった。

自分でもこんなおふぎけをしている場合じゃないと分かっているが、どうしても暗い気分になってしまふのだ。

私は爆裂魔法をこよなく愛する紅魔族、その事について誇りをありありと持っているが、撃つた人物が一時間も共に過ごした仲間でもない相手とはいえ人間。今回は仕方ない事とはいえ、私の愛する爆裂魔法であまり人を殺したくはない。それに今回の悪魔討伐では間違いない彼が一番貢献しただろう。今回の討伐作戦で彼に救われた冒険者がどれほどいるかは私は知らないが、彼に救われた人たちは多くいる事は確かだ。

そんな彼を殺していたら…私はどんな非難を浴びることになるだろう。

やはり暗い気持ちになっていき少しだけゆんゆんの肩に力がこもってしまった。

「大丈夫よ。めぐみん…きつとあの人がだつて何か生き残る手段があったからあんな事を言ったんだと思うわ」

そんな私を安心させるためかゆんゆんは励ましの言葉をくれた…。なんだか今のゆんゆんの背中と同じくらいの筈なのに…大きく見えた。

「! 居たぞおー!」

突然一番前にいた冒険者が叫んだ。

「アークプリーストの兄ちゃん生きてる! 悪魔はもういねえ!」

続けて言われたその言葉に冒険者達は歓喜の声を上げた。

私もゆんゆんもあの人が無事だと分かって緊張の糸を解いた。

「良かったあ……ねえ、めぐみん聞いた？あの人生きてるって！」

「貴方が聴こえてるんですから私も聴こえてます。一々言わなくてもいいですよ」

「こんな時ぐらい可愛くなれないの!？」

「私には可愛さよりもカッコよさが合っていますからね！可愛さなんて必要ないんです！」

「貴方ねえ……」

あの人が生きていて分かってても重傷なのは確かだった。

なんせ片腕が消し飛んでいたからである。

それに、パツと見ただけでも体のあちこちの骨が折れているのが分かった。

それでも生きていてこの人の生命力はやはり化け物だと思う。

傷が出来たのもまだ早いという事もあり、急いでポーションやプリストを集めて治療が行われた。

しかし、骨折などの多少大きな傷は治っても片腕が再生する見込みは無かった。

この人がソロで高難易度をやっている頭のおかしいアークプリーストというのはかなり知られていた。

そんな人が片腕を失うとなれば今後の冒険者生活に大きな支障をきたす事になるのは確実で、最悪、冒険者生命を絶たれるかもしれないのだ。

しかもこの人はアクシズ教徒でありながら既婚者だ。

残っている方の腕で指輪をしていたので分かった。

……この人の伴侶にどう謝ればいいんだろうか。

生きていて分かってても2人の人生を狂わせてしまった事は事実だ……。私はこの人に謝礼金を送る程お金もないし、この人の片腕と代わりになるような物なんて……。

『ヒール』

「うおっ生えた!?!」

「流石王都で活躍してるアークプリーストだなあ…」

「いやーまさかドラゴンと戦った時と同じ状況になるなんて…油断しちゃってたね」

「……………おい待て、私の謝罪の気持ちと今から本気で体を売りに行くこととした私の覚悟を返せ。」

紅魔族とアクシズ教を混ぜると少し溶けるが反発し合う

冒険者達に担ごうか?と聞かれたがもう身体の痛みにも大分慣れたので、心配ないと伝えた。

「にしても、本当に今回のクエストは死人が出なかった事が奇跡だよなあ」

「ああ、あんなもんに戦ってたと思うとゾツとすんな」

「それもこれもプリーストの兄ちゃんのお陰だな」

ああ、だな。と周りの冒険者も同意する様頷く。

どうやら私の評価はこの戦いで大分上に属したらしい。

このままパーティーを組んだりしないだろうか…そろそろ仲間と一緒に冒険してみたいものだが…。

「にしても兄ちゃんその歳でもう結婚してんだなあ?」

「かぁー、強い上にその歳で結婚済みとは…エリス様も平等じゃねえや」

「なあなあ、する事は済ませてんだろ?どんなもんなんだよ、シスターの穴つつうのはよお……」

失礼な事を聞いた金髪冒険者には1発パンチを食らわせ吹っ飛ばす。

それを冒険者達は『あーあ…あの馬鹿野郎…』と蔑んだ目でそいつを見始めた。

どうやら大分顔を知られているらしい。

「……ツテエな!聖職者がそんな簡単に暴力振るうんじゃねえよ!」

「私は魔法よりも物理が得意なプリーストでね。それに聞いた君が悪いからね?」

今度言ったら抱くぞ?と脅すと金髪の冒険者も周りの冒険者も顔を青ざめて一歩退いた。というか金髪冒険者は仲間の元へ尻を抑えながら逃げた。一体何を勘違いしたんだろうか、抱きしてめて背骨を折るぞという脅しなんだからただ逃げるだけでいいのに、何故尻を抑

えたんだ…。

帰ってる途中、チラチラと視線を向けてくる紅魔の子達が居たが、その時は珍しく私も疲れていたもので、申し訳ないと思いつつも、何か反応する事もなく無視してしまっていた。

ギルドに帰ってからは当たり前のように宴会が開かれた。

今回の悪魔討伐は上級悪魔だという事が分かっていたので多量の額が用意されており、今回の討伐クエストに参加していた冒険者はそれなりに財布が潤った様だ。

私も初めて宴会に参加して、初めて酔った。

ビールとは違うんだろが、あのシユワシユワというものは美味しかった。冒険者の間でも人気が非常に高いらしい。今度セシリーに飲ませてみよう…まあ、私より年上の彼女なら既に飲んでるかもしれないが。

まだ友というわけではないが同業者仲間とこうやって馬鹿みたいに騒ぐのも悪くない…そういえば途中から参戦してきた水色の髪の子は素晴らしい宴会芸を見せてくれた。驚きと楽しさから酔いが更に回ってその女の子と一緒に共同宴会芸なんか披露して楽しかったなあ…。

こういうのは前世じゃあんまりなかった事だ。いやまあ、学校の文化祭の時はこんな感じで馬鹿みたいに騒いでいたが、酔いからくる程よい気持ち良さも相まってこっちの方が楽しい気がする。

教会に帰るとセシリーが出迎えてくれた。まあ、教会に住んでいるのはセシリーと私だけなんだからそうなるのは当然だが。

因みに地の文ではこんな感じだが実際は凄い酔っている。

「おかえりなさ…って酔ってるんですか？」

「えへへ…セシリーおねえひゃん酔っちゃっだー☆」

「くうーっ！もう、ズルイですよ！宴会あるなら私も誘ってくれれば良かったのに！私が最近めぐみんさんから預けられた黒猫に火を吹く芸を覚えさせたから見せたかったのにい！」

「ごみえんごみゃん…あ！ほうら！ちやーんと、あくみや、ぶつきよろしちえきたよお〜」

「本当ですか！やったー!!」

自分の事のように喜んでくれたセシリーに連れられ、いつも食事を摂っている来賓室に行くときセシリーがお酒を持ってきた。

「さあ、今日は飲み明かしますよ！アクシズ教は宴会が大好きなんです！それなのにカズトさんってば私の事を呼ばないで宴会しちゃうなんて酷いですよ！今日はとことん付き合ってもらいますからね！」
「アハハ！私だつてこんなだきえどまだまだいきえるよお〜」

たった2人だけだけど教会の中でどんちゃんした後は、夫婦揃ってデロンデロンに出来上がっていた。

セシリーが酒に強かったのは意外だった…まあ後で聞いたら普段から飲んでるから慣れたというだけの事だった。

お酒って慣れるもののかな…。

朝になればセシリーと私は半裸で寝ていた…。

!?

何故半裸で寝ているのか気になるが…なんだろう、絶妙に雑に脱いだ嫁の姿がエロ美しい。…見たいところを見せない男を誘う姿に思わず欲情してしまう…いや、落ち着け。まだ、その時じゃない。流石に朝からはキツイ。

…にしても何でこんな状況に？

いや…私とセシリーの事だから野球拳でもやって途中で寝てしまったんだろう。

というか、だいたいそんな感じな気がする。

すっかりとその姿を目に焼き付け脳の記憶にこびりつかせている最中に、セシリーの可愛い寝言を聞けたり、微笑んでる顔を見れたり、声を聞けたので更に私のテンションは上がった。

なんとなくほっぺを触りたくなり、体が完全に冷え切るまでずっと嫁の柔らかいほっぺをムニムニしていたのも至福だった。

やってる途中、流石のセシリーも目覚めてしまったけどなんか互いにほっぺをムニムニするとう不思議現象が起こってそこから完全に気分がHighになっっていた。

こんな感じに。

イ、ヤ、ア、ア、アアア!!!があいいいいいいいいいい!!!
!!!とうどいいいいいいいい!!!結婚してえ、え、えええええええええ!!

自分でも後から聞いたら引くくらい心の中で騒いでいた。

でも出来るならあんな事を毎日していたいと思っっている。彼女のもちもちとしながらも張りがあり、絶妙に滑らかで肌理細かい肌の感触を感じながら、この世で最も美しい宝石よりも確実に、断然に、煌びやかな碧い双眸を目の前で見つめられるって何その至上天国。

もし、いつでもセシリーのほっぺをムニムニする権利が買える競りがあったら20億エリス払ってでも手に入れるのに…。

そういえば結婚してから朝みたいな甘々なカップル行動なんてした事なかったことに気づいた。

大体やってるのって設定ありの性行為だったし……どれだけ特殊な環境にいるんだろう私たち。

暫く互いのほっぺをムニムニしていると、セシリーが目を瞑って口を少し前に出してきた。

私はそれに応じるようにセシリーと唇を重ねる。彼女のぷっくりとした柔らかい唇の感触が伝わり、ほのかに甘い味がした。

何度かしてきたキスだが、ここまでさっぱりとした気持ちのいいキスは今回が初めてな気がする…。

セシリーの頭を優しく撫でると彼女は更に嬉しそうな顔をした。

流石にずっと半裸では冷えたので服を着て朝食を摂ることにした。

朝食を作っている最中、朝の私の行動に疑問を思ったのかセシリーが聞いてきた。

「そういえばなんで私にあんなことしてたんですか？」

「いやー、だって私たちって結婚してからそういう甘々な行動なんてしたことないじゃない？やってみたいなあ…って、それにセシリーのほっぺムニムニするのって普通に気持ちいいからさ」

「へー。じゃあ、私のほっぺを触りたかったらセシリーお姉ちゃんって、言ってくれば触らせてあげてもいいですよ？」

ニヤニヤと聞いてくるセシリーが狂おしいほどに好きだった。

「そういうところ大好きだよ。セシリーお姉ちゃん」

私はなんの躊躇もせずにセシリーのほっぺを触った。また柔らかい感触が手に伝えられる。それだけで顔が緩む。

自分から言ったのに少しだけ驚いているセシリーに更に意地悪しなくなつて、ほっぺを触っている途中で耳元に口を持っていき…

かぷっ

「ひえっ！」

甘噛みをした。

突然のことで可愛い声を出すセシリーを無視しながら時折圧力を変えて耳をハミハミしたり、ほっぺをムニムニしたりした。

どちらも柔らかくてすべすべしている。耳に関しては甘く感じた気がした。

「あつ…♡…んっ…♡…ちよ…か、カズトさん…うみ、耳は…っ…や、やめ…♡…あつ…♡…でもこれはこれで…んっ…♡…悪くないかもっ…♡」

少しの間、抵抗したセシリーだったが、何かハマったのか今では放置状態だ。

耳元からセシリーの喘ぎ声に近い何かはずっと発せられるが、私は遠慮なく行為を続けた。

いつも場のペースをセシリーに譲ってる分、こうやって自分が優位に立てる時は純粋に楽しいし、セシリーが可愛い反応を見せてくれるのだ。今回はセシリーの弱点は耳だということが分かった。

自分が満足するまでハミハミと甘噛みを続け、終わった頃には料理も完全に冷え切り、セシリーは息が絶え絶えだった。

少し怒られたが、またいつかお願いします…と言われたので私はご満悦だ。

女神さまからの要望に応えない訳がない。

今度は私がからかい気味に『今からでもいいんだよ?』とニヤついて言う。セシリーは顔を赤くして『今はいいんです…!』と少し涙目で言うてきた。彼女は普段から考えられない程に責めになった時は弱い。それがまた、愛おしく感じる。

冷え切ってしまった料理を食べ終わった後はいつも通り教会内の清掃を行った。

セシリーは布教しに行ったが…私が婚姻届を描いた時と同じことをしてゐるのだろうか…変な男に引つかかってなければいいな…と想いを寄せながら箒を振るう。…今思ったら、私以上に変な奴は中々いないな。

集めたゴミは邪悪なエリス教徒がのさばっているエリス教会にでも撒いておけばいいですよ、とセシリーは言っていたがやはり宗教争い故なんだろうか。セシリーの命令ならば絶対従わなければならぬのだが、やはりまだアクシズ教徒になり切れていない私は良心が痛む。

…いや、まあやるんだけど。

私は掃除し終えた部屋を後にしてエリス教会まで赴くと、なんの躊躇もしないでエリス教会の窓に向かってゴミ袋を投げ込んだ。

バリンツ!

けたたましく鳴り響くガラスの破片の音と共にゴミ袋が破れ、中に入っていたゴミが溢れ出し、異臭が漂ってくる。

ドタドタドタドタツ!!

何やら激しい足音がしてきたので自前の身体能力に物を言わせてその場から逃げる様に走った。

「オラアツ!!出てこい!邪教徒オオ!!もう宗教戦争でもなんでもおっぱじめようじゃないのよおお!!」

…ここで説明しておくが、この街のエリス教会はかなり人目のつく場所に建てられており、アクシズ教団がエリス協会に嫌がらせをしている風景は半ば定期的に行われるちよつとした小さなイベントの様なモノになっている。今回カズトが行われたことについて最初、街の住民は『また新しいアクシズ教徒が来やがった…』くらいの反応しかなかったが、ゴミ袋が強化されたガラスの窓を突き破ると思っておらず、目を見開いていた。ちなみに、なぜ強化ガラスが貼られているか言えば頻繁にアクシズ教徒が石を投げ込んでくるからである。セシリーもその中の代表格であった。

そして、人目が多いという事は…

「何やってんですかあの人…まあ、アクシズ教徒ですからね…やりかねませんか…」

何処かの爆裂魔法が大好きな紅魔族にも見られているかもしれないという事だ。

怒声が聞こえなくなった…：：：上手くに逃げ切ったらしい。

あのエリス教会の管理人の女性も優しい人なんだがどうもアクシズ教が絡むと短気になる。あと性格が悪魔とか言うときれる。貧乳野郎とか言っちゃうともっとキレル…：：：あれ？やっぱ優しい人じゃない？

だが、まあまともな聖職者をやってるからには優しい気質なんだろう。

私たちアクシズ教徒がそれを完全にぶち壊しているが…。

アクシズ教会に戻るとまだセシリーは戻っていなかった。

あらかた掃除も終わってしまったので正直暇だ。

今から適当なクエストをしに行って時間を潰してもいいが、今日はセシリーに『おかえり』といたい気分である。

いつもいつも『おかえり』を言われるのは私だからだろうか、セシ

リーに『おかえり』と言いたい欲求がある。訳の分からない思考だが本当にそう思ってしまったているから仕方ない。

夕食を作るにしてもセシリーがいつ帰ってくるか分からないし、そもそも作るの早すぎるし…ああ、暇だなあ……。

と、考えていた時に不意に扉が開いた。

ギィィ…

「おかえ……」

「すみません。カズトというプリーストの方を探しているんですが…」

危うく知らない誰かに『おかえり』と言おうとしてしまったがなんとか踏みとどまった。

扉の方に目を向ければ、昨日の悪魔討伐の時に悪魔と共に私の腕を吹き飛ばした紅魔の子1だった。

取り敢えず何か私に用があるので話を聞いてみることに。

「やあやあ、昨日の悪魔討伐はお疲れだったね。昨日は大活躍だったじゃない。流星は紅魔族だね！…それで、どうしたの？こんな時間に…って訳でもないけど」

「どうも、昨日ぶりです。実は昨日の事を謝りに来たんです。…治ったとはいえ私は貴方の腕を消し飛ばしてしまったのは事実ですし…」
「別に気にしなくていいですよ？確かに痛かったですけど生きてますし、今でも妻と一緒に過ごせてますし、面白いものを見せてもらいましたし…こっちの方から礼を言いたいぐらいですね」

そう伝えると少女は少し困惑した。

「え、いや、そんな軽く？もつとこう…神妙とした感じで言うことじゃないんですか!？」

「別に腕の一本くらい大したことじゃないよ。ウチの妻のためだと思えば私は心臓をドブに捨てられますからね。まあそれ以外だったら普通に嫌ですけど」

「その貴方の妻にだって会えなくなるかもしれないですよ!？」

「私の判断でしたからね。それに絶対生き残るって自分を信じてましたし。終わりよければ全て良しってヤツですよ」

「……なんだか謝ってる私が馬鹿みたいじゃないですか……」

そう言つて紅魔の子は少しだけ項垂れた。

まあ、この年頃の子の出来事としては割と大きなものだったんだろう。それをあっさり流された形で終わらせてしまった私はこの子から多少恨まれてもしょうがない。

「一応……貴方の妻の方にも謝罪をさせていただきます……貴方はよく思つていても貴方の妻はよしとしないかもしれないので」

「別にいいよ。けど彼女もそこまで気にしてないんじゃないかな（ていうか言つてないし）……というか逆に君の方が気をつけてね」
「？」

私の言葉の意味が分からずに紅魔の子は首をかしげる。

私としては彼女がセシリーに出会つた瞬間に抱きつかれて困つた表情を浮かべる情景が容易に浮かぶのだが、彼女に分かる術はない。

そういえばおかしな言動が多いとされる紅魔族だが今のところ特に目立つた言動はない。

アクシズ教といい勝負だと揶揄されるくらいのはずだったから氣になつてただけど……まあ、いいか。

あ、でもそういえばこの子の名前をまだ聞いてなかつたな。

この際聞いてしまおう。

「そういえば、君の名前を聞いてなかつたね。君の名前つてなんて言うんだい？」

極々自然に聞いたつもりだが、紅魔族の子は私の言葉を認識すると多少気分が上がつたようで紅い瞳が輝いた。

眼球つて光るものだったっけ？

「この雰囲気流されてつきり名前を名乗れないのかと思つたのですがいい機会です！貴方に教えて差し上げましょう！我が名はめぐみん！アークウィザードを生業として爆裂魔法を操る者！！」

ああ、おかしな言動つてこういう事ねえ……

ポーズを決めながら盛大に自己紹介をしたためぐみんに（それをした度胸も含めて）賞賛の意を示して拍手を送る。

「なんだか素直に受け止められるのは新鮮ですね……今までコレをや

ると外の人たちは苦笑いか失笑か、顔を顰めるかの三択でしたから」
紅魔族というものが少しだけ理解できた気がする。

話し相手も出来たのでセシリーが帰ってくるまで2人で時間を潰してはいかがでしょうかと考えると無難に言葉を選んでいたところ、めぐみんの方から話しかけてきた。

「そういえば、カズトさんは昨日ギルドで『冒険者になってからという意味でもアクシズ教徒になってからという意味でも日が短い半端者』とかなんとか言ってますでしたか?」

「ああ、言ってたね」

「実際のところ、冒険者を始めてどれくらい経ってるんですか?」

「ん〜……大体2週間くらいかなあ」

「2週間ですか……え?2週間?」

「そうだよ?因みに王都に行ったのが2日目あたりかな」

「いやいやいやいや、おかしいでしょう!」

めぐみんは『何言ってるんだコイツ』という表情でカズトを見る。

「あ、それとアクシズ教徒になったのが1日目ね」

それを無視して発言したカズトの言葉から、少しだけ納得した反応を示した後には可哀想な人を見る目が変わった。

なんでそんな視線を向けるのかカズトは分からないが……取り敢えず耳を傾けた。

「道理で……アクシズ教徒になってしまったからこの人は……というかアクシズ教徒達はこの人のような方が?……だからデストロイヤーが通つても……成る程……」

何か一人で色々と納得しているめぐみに声をかける。

「というかデストロイヤーっていう物騒な響き何?ゴジラでもいるの?」

「めぐみんさんは冒険者になってどれくらい経ってるの?」

「え?ああ……そうですね、冒険者カード自体は紅魔の里で幼い時に登録していたのでそれを含めると長い期間になりますが……冒険者の活動を本格的に始めたのは大体1ヶ月くらい前です」

「じゃあ、私からすれば君は冒険者としての先輩な訳だ」

「む。今『先輩』と呼びましたか？」

「うん。呼んだけど…気に入らなかつたかい？」

「いえ全然！むしろ私の事を今後『先輩』と呼んでくれても構いませんよー。」

「そう？じゃあ。先輩、これから宜しくね」

「ええ！任せなさい！なんなら今からでも適当なクエストに行つて我が爆裂魔法を素晴らしさを教えてあげましょうか!!」

何か琴線に触れたのか先輩が興奮している。

さつきまで自分から私の妻に謝ると言っていたのに…というか目が紅く光るのはなんなんだろう？猫か？

いや、多分違うんだろうな。

「落ち着いて下さいよ先輩。私の嫁に会つて謝るんでしょう？」

「ハツ!?そうでしたそうでした…私としたことが…つい…」

「つい、つて言うほど軽くない気がするんだけどな…客観的に見たら…まあ、その爆裂魔法の素晴らしさはこの身で実際に体感してますからよく分かつてるつもりです」

「あう…すみません。謝りに来たというのに…こんなはしゃいでしまつて」

「いや、感情の起伏激しいですね先輩」

そのまま明らかに歳下のめぐみんを先輩呼びをする事が確定したカズトは、感情の起伏がやたらと激しいめぐみんを多少揶揄いながらセシリーの帰りを待っていた。

何気にこの世界でまともに話したのはスズさんとセシリー、王都でお世話になったセナさんくらいしかいない彼にとって地味に楽しい事であった。

そして、楽しい時間というのは意外に早く流れるものである。

「♪♪♪」

どこか聞き覚えある鼻歌を聞こえて来てカズトは表情を緩ませる。

その反応からめぐみんはこの人の妻が帰ってきた事を認識した。

「たっだいま〜!」

「おかえり。セシリー」

「すみません…お邪魔して…え？…セシ…？」

「きゃ〜！！めぐみんさんじゃないですか！なんでアクシズ教会に？…そうだわ！これはきつと朝から夕方まで布教を行った私へのアクア様がくれたご褒美ね！きつとそうよ！感謝します！アクア様！！可愛いロリっ子に出会えるなんて…私、幸せです！！」

固まった先輩に問答無用で抱きついたセシリーに笑みを浮かべる。想像通りの光景すぎて笑うのは仕方ないと思うんだ。

「も〜！なんでカズトさんは知らせてくれなかつたんですか？めぐみんさんがアクシズ教会に来てるって言われたらすぐ様帰って抱きつきに行くのに！もー、意地悪ですね！」

「いやー、ごめんごめん。後でところてんスライム食べさせてあげるから許してよ」

「私、食べ物で釣られる程軽い女じゃないですよ？」

「最初に顔で求婚して来た可愛い女はこの誰だったっけね？」

「…さあさあ！めぐみんさん！アクシズ教会に来たって事はアクシズ教徒になりたいのよね？そうよね？お姉ちゃん否定なんて絶対しないわ。むしろ喜んで貴方をアクシズ教に迎え入れてあげるからね！」

私の言葉を聞き流した可愛い嫁が早速勧誘へと移った。

彼女の胆力の強さというか強引さはアクシズ教じゃ誰もが持つてるんだらうか。

まだセシリーと元アクセル支部の管理長に結婚式で食べ物目的で来た連中以外にアクシズ教徒に会っていないから分からないが、アクシズ教徒が一体どんな人種で構成されているのか非常に気になる。

いずれセシリーが前に住んでいたアルカンレティアという街に行ってみるのもいいかもしれない。

「ちよ、ちよつと待ってください！」

「あら？どうしたのめぐみんさん？」

「え、カズトさん！まさか貴方の妻はこの人の事ですか!？」

「酷いわめぐみんさん！私たちあんな事やあんな事をした仲じゃない！気軽にセシリーお姉ちゃんって言っていた貴方はどこに行ったの？」

「そんな事一度たりとも言ってますんよ!?それに、お姉さんと特に何かした覚えはないのですが!」

「ええ!そんな!」

「そんな...!じゃありませんよ!」

「ぶっ...アハハハハ!」

二人のやり取りが面白い物だから遂に吹き出してしまった。

前世でこんな面白いやり取りが他にあったかな?

というか二人は普通に美少女の部類に入るからなあ、普段見ない光景からくる笑いかも知れない。

「わっ、カズトさんが笑ってるわ珍しい」

「え?この人そんなに笑わないんですか?」

「結婚してからだと一度も笑った事ないですね。微笑むっていうのなら何度でもあるんですけど」

「アレ?そうだったかな?私って結構笑つてると思うんだけど」

戦闘中とか特に。夜枷や枕を共にした時なんかも結構笑つて...ああ、そっちが微笑んでる方か。

というかセシリーが何かと面白い行動する度にもいつも笑顔で見守っていたり、普通に笑い転げたりして結構笑つてると思うんだけどなあ。

どうやらセシリー目線では私は表情筋を動かさないタイプの人間認定されていた様だ。

そして、そんな会話を経て本題を話し始めたためぐみんはセシリーに昨日の悪魔の一件で私が本当は片腕を失っていた事、最悪命を落としていた事、そしてそれをやったのは自分だと説明し謝罪した。

めぐみんから真面目な顔つきでそんな事を言われたセシリーに聞いてのだが....。

「なんだ。そんな事だったのね。珍しくめぐみんさんが真面目な顔で言うから世界でも終わるのかと思ったわ。...確かに私の大切な夫の片方の腕が消し飛んじやたっていうのは驚いたけど、生きていれば問題ないわ!だって、そんな彼を愛せばいいだから!めぐみんさんは

心配し過ぎよ？でも、貴方くらいの年齢なら仕方ないのかも知れないわね……そんな時はお姉ちゃん胸で泣いたりしてくれてもいいのよ？どう？お姉ちゃんって言いながら私の胸に飛び込んでみない？」

途中まで大人のお姉さん……または聖職者として正しい言動をしていたセシリーだが、やはり根はブレなかった。

途中で自分の願望を混ぜ込んでしまつて真面目な話が真面目な話じゃなくなつてしまった。

「途中まではプリーストぽかつたのに……でもありがとうございますお姉さん……お陰で気分が楽になれました」

「お姉ちゃんって呼んでもいいのよ？」

「……カズトさんもありがとうございました」

「いいよ、本当に気にしなくて。あ、でもたまには懺悔とかしに来てもいいんだよ？ぶっちゃけエリス教会の方に人が流れちゃつてアクシズ教会は常に暇だからさ」

「……たまに顔を見せます」

なんだかどちらも歯切れが悪い返事だが、別に気にはしない。

紅魔族だろうとアクシズ教徒を相手にするのは疲れるんだろう。私的にはどちらの相手も楽しいのでいつまでも続けられる自信があるが、先輩には酷な様だ。

先輩がそろそろ自分が泊まっている宿に帰ると言うのと、セシリーと一緒に寝泊まりしたいと言い出した。

しかし先輩からの返事はNO、罪の償いとして最低限の願いは叶えるつもりらしいのだが、二人分の宿代は払えるかどうか怪しいらしい。

なら私が出せば？とセシリーが容赦なく言つてくると、私は喜んで出すことにした。

先輩は戸惑つたが、私としては嫁にいい思いをしてもらいたいの为本望なので、払うことが決定し、どうせだからと私もその宿で泊まることになった。

「ひゃほう！めぐみんさんの温もりだわ！」

宿のオーナーに金を渡してめぐみんの部屋に入ってみれば早速セシリーが動き出した。

やはりロリには目がないんだろう。確かシヨタよりもロリ派と前に自分で公言していた。でもどちらも同じくらい好き、とちよつとよくわからない好意の基準をしていたが……まあ、それほどテンションが上がっているということだ。

即座にめぐみんが寝ていたであろうベッドにダイブしシーツなどの匂いを全力で嗅いでいる姿は子供らしくて可愛らしいとも思うし、見た目からの多少のギャップで更に可愛く見える。

「子供ですか!?というか気色わるいのでやめてくださいよ!？」

「可愛い」

「ちよ、これを可愛いと言いますか貴方は!？」

「言うよ?逆にこれを可愛いと言わないでなんて言うの?」

私の発言にドン引きした様な表情を見せる先輩を気にせず今日の寝床について話した。

「今日私は床かそのソファで寝るよ。二人はそのベッドと一緒に寝てていいよ」

「え?今その話するんですか?…まあ、いいですけど。……一応、客人なんですし今日は私がベッド以外で寝ますよ。どうぞ二人で仲睦まじくベッドの方で寝てください」

「それも魅力的な話だけど、妻が先輩と寝る方が幸せそうなので私はそのソファで寝るよ」

「さすがカズトさん!話が分かるわね!」

「そうですね?……本音を言えばこのお姉さんとあんまり一緒に寝たくないんですが……」

「一緒に寝ましょうよ!めぐみんさん!それと私の事はお姉ちゃんって上目遣いで言ってきてくれないかな?」

「そういえば、夜を食べてませんでしたね」

「そういえばそうだね」

さらつとセシリーの発言を無視した先輩に苦笑いしつつも夕食の事を考える。

夜は教会の方で食べようと思っていたけど、流石にこの状況で教会に帰るのはめんどくさいよなあ……。

「あ、この宿屋で食事のサービスとかないの？」

「あ！ありましたありました！全く利用してないので忘れてました」

「え、利用してないの？」

「はい、泊まるだけの料金も結構ギリギリで…食事なんて出来なかったものですから」

チラチラとこっちを見てくる理由が手に取るように分かるのは先輩の本質を理解したからだろうか、それともただ単に先輩が分かりやすいからだろうか。

まあ、特に気にもしないで金払って飯食って、その後に普通に寝ちゃったけどね。

因みにソファで寝ていたはずんだけど…何故かベッドの上で寝ていた。

お陰でめぐみに朝起きた瞬間に爆裂魔法の詠唱を始められるという恐怖体験が起こった。必死に止めた。

……一応言うけど普通に痛い嫌だからね。

初めてのパーティー……？

朝起きたら美少女二人を両脇に抱えて目覚めたものだからラッキードと思うたが、そんな事無かった。まさか人類最大の火力を持つ魔法を朝っぱらから打ちだそうとする暴拳に先輩が出るとは思わなかった。

普通に怖かった。

「…一応言つとくけど嫁以外の女の人に私は興味ないからね？」

「女性としてその言葉は大分傷つくんですが…それに、それを聞いても信じられないんですが」

「まあ、信じられないのは無理もないよね。客観的に見れば私が完全に黒だからね」

取り敢えず弁明を試してみたが効果はあまり無いようだ。というか私の弁明自体成功例が少ない気がする。

未だに横で幸せそうに爆睡しているセシリーに問いただしてみた。いものだが、そんな理由で彼女の眠りを妨げるのは頂けない。

「こういう空気になった時に私、どう話せばいいか分からないな」

「私ですよ。……はあ…もう取り敢えず、朝食にでもしますか？」

「…そうしたいのも山々だけど…私はセシリーが起きるまで待つよ」

「今の私から言えば貴方がこのお姉さんに何かしそうで非常に怪しいんですが…」

「夫婦だから何してもいいのさ。まあ暴力はいけないけど。彼女に変な事をする気は無いさ…耳を噛むくらいは…」

「それ私の前で言いますか!?!というかやっぱり変な事するつもりじゃ無いですか!?!」

「セシリーは私の甘噛み好きなんだけどなあ…(昨日分かったことだけだ)」

「…なんか恥ずかしくなるので、そのサラツと夫婦しか知らないような秘密を語るのをやめてください…」

「ま、先に食べておいでよ。セシリーが起きたらそっち行くからさ」

「……分かりました」

訝しみながら扉から出て行く先輩を見送り、セシリーの方へと目を向ける。

そこで彼女の幸せそうな寝顔を見ると慣れないニヤケが出てくる。部屋は物音を立てるものが極端に少なくなっただからか彼女の寝息しか聞こえない。

その姿だけを見れば聖女の睡眠の画と見てもおかしくはない。それ程彼女は美しい。

彼女を鼻屑し過ぎだ。と先輩から言われそうである。

まあ、そう言われても仕方ない程に私は彼女に溺愛をしているからしょうがない。

「ん……ふぁあ……」

癖で眠っている彼女の頭を優しく撫でて続けていたせいか、セシリーが起きてきた。

「おはよう。セシリー」

「……んあ、カズトさん？おふぁ……ようございます ……あれ？めぐみんさんは？」

「めぐみんなら下でご飯食べてるよ。起きたばっかりだし、顔を洗ってから会いに行けばいいんじゃないかな？」

「…そうですね。そうします」

寝ぼけ気味な彼女に洗面台の前まで行かせて顔を洗わせる。

顔を洗った後はさっぱりしたのか寝ぼけた表情からいつものセシリーの表情になった。

取り敢えず私たちも朝食を摂ろうとセシリーに提案すると彼女は頷いた。

私たちが下に降りて食堂の方へとやってくると先輩が料理を凄まじい食いつぷりで食べていた。

荒っぽい食べ方ながら食べこぼしは一切していないという器用な食べ方をしていて食に対する意識が高いなあ…なんて思いながら近づく。

「やあ、先輩。待たせたね」

「案外早かったですね…本当に何もしてないんですよね？」

「え？カズトさん私に何かしたんですか？」

「いや？頭撫でてただけだよ。セシリーは可愛くなって、心の中でニヤケながら」

「フッフ、私は美人な上に可愛いですからね！」

「…恥ずかしいので公の場で言うのやめてくれませんかね…」

この二人はまるで周りの事を考えないで行動して、本来なら本人たちが知られば恥ずかしい事を平然と言うのだから、こつちが恥ずかしくなってしまうのがない。

「別にいいじゃないか。仲睦まじい夫婦らしくて。あ、私は軽めにパンでいいや。セシリーは？」

「んー…私的には可愛いロリっ子であるめぐみんさんと同じものを食べたいので、同じものを…だから、そのめぐみんさんの食べかけのやつを一つだけでもいいから食べたいなあ…なんて」

「あげませんからね!?あつ、ちよ、コラっ!?いい大人がみつともない！」

通常運転なお姉さんが私から骨つき肉を奪おうと襲ってきたので、私はそれに必死に抵抗する。

この人の夫の方へ目を向けて救援を呼ぼうかと思っただが、ただ彼女がしている行動を可愛らしいと表現して傍観しているだけだった。この人自分の嫁の事だと甘過ぎる！

「お願いですよめぐみんさん！その今食べてるやつでいいですから！それか一口だけでもいいですから！」

「今お姉さんに許しちゃうと今後もこう言う頼み事をされる度に許しちゃう癖が出来てしまいそうなので嫌です！」

「そんな水臭いことを言わないでくださいよお！出来たって良いじゃないですかあ！」

「ちよつと！朝なんだから他のお客様に迷惑でしょ！静かにしなさいよ！」

「あ、はい！すいません！」

なんで私が謝ってるんだろう……。

結局お姉さんには料理を奪われ食べられた。しかもその後はシェアして食べるという非常に遺憾と言わざるをえない結果となった。お姉さんはそれでも飽き足らずに自分の夫にも食べさせてもらっているのだから、本当にアクシズ教徒は自由奔放過ぎると思う。

「あの、カズトさん」

「ん?どうしたの先輩?…あ、セシリーはい、あーん」

「あーむ…あ、結構このパン美味しいですね。エリス教の配給のパンよりも美味しいですよ!」

「そのパンの味をなぜ知ってるのかは置いといて…今日私とパーティーを結成してくれませんか?」

「え!?パーティー!?!」

何故か突然驚いた様子を見せた彼に不思議がるも、理由がわからないので話を進めることにする。

…:彼が驚いた拍子にお姉さんの喉に千切ったパンが変なところに入れたのかお姉さんが苦しそうに咳き込んでいるが無視しよう…。

「はい。私としましてもこれからソロでやっていくのは厳しいところですし、それと『何故か』は知らないんですが、私ほどのアークウイザードがパーティーに恵まれなくてですね…」

「組む組む組む!組むよ!いやあ、私も何故かパーティーに恵まれなくてねえ…ソロだと割りかし楽なことは多いんだけどやっぱり仲間と苦楽を共にするっていう感覚が欲しくって…いやあまさか、先輩にお願いしようとしていたことをまさか先輩からいつてくれるなんて!嬉しいなあ!…あ!?セシリー!?!大丈夫!?!」

…:どうやらこの人もパーティーで苦労していたようだ。案外身近に同類がいて、しかもその相手がこの人となると、なんだか複雑な気持ちになる。

というか、私はただ『これだけ要望を聞いたんだからそろそろ私の要望も聞いてくれたっていいでしょう?』みたいな感情のまま一か八かでお願ひしたのは、ここまで好反応されるとリズムが狂う…。

そもそも二人の苦いものを噛み潰したくなるような、甘々な言動を見たり聞いたりするだけで、既に狂ってる時が多いが。

その後、無事に料理を食べ終わった後は一度解散することとなった。

解散と言っても、私とカズトさんはギルドへ行き、お姉さんは教会に帰るだけなのだが。

お姉さんがまた私と一緒にいたいなんて言っただけで手間がかかるだろうなと思っただけなら、「ロリっ子と一緒に一夜を明かせたので満足した」らしいので、頑張ってくださいね!とエールを貰って私たちは送られた。：前のあの人なら絶対もつと要求してくると思っただけなのに：夫がいる影響で変化があったんだろうか？

カズトさんとギルドに向かっている途中、私はこんな事を聞いた。

「二人は随分仲が良いのは分かりましたが：実際付き合ってからどれくらい経ってるんですか？」

純粹に気になっての事だった。私たちがアルカンレティアを離れてもう1ヶ月近く経っていると思うのだが、それでもあそこでの思い出は色濃く残っている：というか濃過ぎて色々混ざっちゃってるが、一応そこその関係を保持してしまったお姉さんが、一切恋人なんていない雰囲気を持っていったのに、実際は相思相愛の彼氏がいて、しかも結婚しているとは思わなかった。

「2週間くらいかな」

「……………え？」

「どうしたの先輩？急に立ち止まっちゃって」

「……………冒険者を始めたのは？」

「2週間前」

「……………この街にやってきたのは？」

「2週間前」

「ほぼ同時じゃないですか!?そういえば貴方この街に来て1日目ですクシズ教に入ったと言っていましたね!」

「ああ、うん。その時にセシリーにアクシズ教に入らないかって言われてね。それで、その時同時に結婚もお願いされたんだよ。出会って数秒しないうちにだよ？あの時の出来事は私も相当驚いたなあ……」
「いや、相当驚いたって…そうでしょうね!?何故出会って数秒もしない内に若い男女が結婚するものですか!?婚活に悩んでいる人たちがそれ聞いたらキレますよ!？」

「いやー、あの時はセシリーのことを歩く天使か女神、または聖母にしか見えなくてねえ…今でも天使だけど。一目惚れってやつだよ。セシリーはイケメンを見つけたって言って求婚したようだけど」
「どっちも不純な理由じゃないですか!？」

「いや、そうでもないよ？結果的に本当の意味で愛し合ったんだからそれでいいでしょ」

「いやよくな…！ツ…はあ…もういいです。…なんでクエストもしていないのにこんな疲れるんですかね…」

これ以上ツツコミを入れれば更なる爆弾が落とされそうな気がしたので、もう聞かないでおくことにした。多分これ以上聞いたら私の身がもたないと思う。というか私たちが少し目を離れたうちに知り合いがスピード結婚するなんて本当に世界とは何が起こるか分からないものだ…。

ギルドに着くと冒険者たちが奇異な目で私たちを見てきた。

私たちが一緒に歩いているからだろう。隣に立つ彼はアクシズ教徒ただけでなく、やべーやつなんていう通り名までついてしまっている。

「先輩、何か受けたいクエストとかありますか？」

「いえ、特には…あ、ですがなるべく雑魚がたくさん出てくる奴で更に高い報酬金であればそれで…」

「雑魚いっぱい報酬金ね…」

「それか強力な奴一体だけっていうのもアリですね」

「極端ですね。先輩…まあ、探してみますけど」

そう言って彼はクエスト掲示板の方へ行ってしまった。

様子を見てみたが少し時間がかかりそうである。

しようがないのでテーブルで座って待つことにした。

ギルドに入ってから冒険者に視線を送られてきたが、何故か誰なのか分かってしまう視線をチラチラと感じた…。

視線を感じる方向に目を向ければなんとなく予想していた通りのボツチ娘がこちらを驚いた様子で見ている。

目が合い、何か言おうとしたのか口をパクパクしている。

私はそれから目を逸らし、へっ…と分かりやすく笑うと…。

「ちよつと!?!アンタ今の『へっ』ってなによお!?!」

「何ですか? ゆんゆん、騒がしいですね」

「めぐみんがあの人と一緒にギルドにいたから何かと思って見てれば、何で煽ってくるのよ!?!」

「独り身のゆんゆんが哀れに思えて少し笑ってしまったんですよ」

「その言い方やめてよ! 何か誤解されちゃうでしょ!?!」

まあ、私が言ったことも嘘ではないが、本当はゆんゆんに話し相手になってもらう為だった。本当に時間潰しの為に誘っただけだ。決して、あの人ならゆんゆんでも拾ってくれるんじゃないか? と思いはから呼んだ訳じゃない。

私の思惑もいざ知らず、当然の疑問をゆんゆんは投げかけてきた。

「…どうしてあの人となんかパーティーを組もうとしたの?」

「彼は王都で活躍している凄腕のアークプリーストですよ? そんな彼がソロで活動していると聞いたのであればパーティーに誘うのが普通では?」

「まあ、それは確かに言ってるけど…めぐみんだってあの人…その…モンスター…の殺し方…見たでしょう?」

…忘れてはいない。というかあの衝撃的な光景を忘れられるのなら忘れてしまいたいくらいだ。

「あの人…がどんな人なのか私もまだよく分からないけど…やっぱりやめておいた方が…」

「つまり、私が普通に敵を倒せばいいって事だろう?」

「ひゃ!?!」

「驚かせてごめんなさいね。もう一人の…紅魔の子…? でいいのか

な、私の名前は飯野和人、カズトでいいよ」

「あ、こちらこそどうも…私の名前は……って何よめぐみん、その目は…」

「いえ、紅魔族の次期族長たるものが紅魔族の風習を行わないなんて…と思いませんね」

「わ、分かったわよ！やればいいんでしょ！やれば！…すう…ふう…わ、我が名はゆんゆん！アークウィザードにして上級魔法を操る者！やがては紅魔族の長となる者！…うう、恥ずかしい…」

「へー、紅魔族の族長候補なんだ。魔法のエキスパートが沢山いる紅魔族の中で族長候補になるなんて凄いじゃない」

「いえ、カズトさん。この子は族長の娘なのである意味コネですよ。魔法だって中級魔法しか使えません」

「誰のために私がこうなってると思ってるのよおお!!?」

ゆんゆんが襲いかかってきた！

強化フラグ

前にセシリーが探してと言われていた子がこんなに早く見つかるとは思わなんだ。

ゆんゆんという名前は紅魔族特有なんだろうと納得して受け入れつつ、彼女が紅魔族の名乗りを恥ずかしかっていることに少し疑問を持つ。紅魔族に会うのはこれで二人目であるのでまだ断定は出来ないが、紅魔族の中でも紅魔族特有の自己紹介をするのが恥ずかしい者も居るのだろうと勝手に結論づける。いつか、紅魔の里には行ってみたいものである。何でも、アルカンレティアとも距離的に近いと聞くと。セシリーと新婚旅行という事で行ってみるのもいいかもしれない。セシリーにとっては帰郷ともなるだろう：なかなか名案を思いついたな。

：それはそうと、2人の取っ組み合いは格差社会が歴然と見えて物悲しくなる。見た目は同じ歳くらいなのに：セシリーにも負けないのではないかという巨峰を持っているゆんゆんに純粋な疑問を持つ。発育が良いにも程があるだろう。

ジロジロ見てたら隠されたので、誤解を解くためしようがないと思いつつ正直に『誤解させたらすまない。いや、君の胸部がなんでそんなに歳不相応なんだろう？と興味を持ってね』と言ったら、今度は睨みつけられた。それに、先輩からも睨みつけられた。面白いことに先輩はゆんゆんを守るかの様に動いていたので、二人の仲の良さが伺えたが、二人からの評価は落ちたらしい。

もう決まり文句ではあるが、『私は嫁以外に体の興味が無い』と言うと、ゆんゆんはホツとしていた。正直、ちよろいと思った。父でもないのに、将来の心配をしてしまった。

流れでアクシズ教に勧誘しようかと思ったが、まだ練習不足の私では勧誘は断られそうなので、セシリーに全部丸投げする形で『今度アクシズ教会に来てみないか？』って言ったたら、頷いてくれた。

途中まで渋っていたんだけど、種族関係なく友達を作る事だっけ出て来るんですよ？って言うてからガラリと雰囲気が変わってしまった、

余りの豹変ぶりに彼女の過去を想像せざる負えない…。

先輩に猛烈に反対されていたけど、結局は来ることになったので、私は大満足である。

「彼女を邪教に染めないでくださいよ…あの娘は純粹ですから…」

「私はきつかけを与えただけだよ。あとはセシリーの手腕と彼女の意思次第だね」

途中、先輩からそんな事を言われたが、私としてもアクシズ教は狂っているが素晴らしい宗教だと思いついてるのでオススメしたいところだ。

一応、エリス教の清貧が美德という点や、気遣いがやがて自分に巡り回ってくるので人にいい事をしましよ的な教えは人間性で言えば素晴らしいと思う。

ただ、やはり押しさえつけられた欲求というものは時に爆発してしまうもの。アクシズ教は欲に実直なまでに従う半分獣みたいな人たちの集まりだ。常に法を破らない程度で欲を満たし、本人達的には満足している。その様子を見ると、社会に馴染めない個性的な人たちが行き着く最終的な楽園…とも言える。その好きなように好きな事をする教えというのは、最も人間の事を思ってる事なのかもしれない。まあ、調和や平和というのとは無縁であるが。

アクシズ教の素晴らしさを金運アップや、恋人がすぐ出来るなどの詐欺紛いな嘘で偽るのは良くないと私は思う。アクシズ教本来の素晴らしさはその一度だけでもいい自由意志の解放だ。

一時的にでも本当の自分というものが解放される解放感からの心地よさは尋常ならざるものである。その心地よさの度合いによって今後のアクシズ教の存続が決まるのではないだろうか。その心地よさがずっと続けたいと思えばアクシズ教に入り続けられればいいだけの話で、たまに普通の生活に戻ってアクア様の事を慕えばいいと、私は思う。

まあ、そんな簡単にまとまる奴等じゃない事は結婚式の時に分かったので、結局は迷惑集団の集まりとなってしまうのだが。

「ところで、今日はなんのクエストをやるのですか？まだ何も聞かさ

れていないのですが」

「今日受けた依頼は、ジャイアントチキンっていうモンスターの討伐依頼だよ。気性が荒くて、鉄とか簡単に砕けちゃうほど硬い嘴持っているから、この装備だと普通に骨が折れたり四肢とか吹っ飛ぶ可能性があるけど…まあ、回復するから問題ないね」

「いや、十分問題ありますよ!?!なんでそんな死に向かっているんですか!?!」

「死ぬつもりなんて一切ないけど…?」

「何ですかその『なに言ってるだコイツ?』みたいな表情!?!私おかしい事言いました!?!いや、おかしい筈がないんですよ。いいですか! 冒険者とは常に危険と隣あわせの夢溢れる仕事なんですよ? そんな気持ちでやっていたらですね…!?!」

「大丈夫だよ。私強い(人の体と能力貫ってる)から」

「あ、いや、確かに貴方は強いですよ? 上級悪魔と殴り合える人間なんて早々に…!?!」

「あ、見て、あいつじゃない?」

「いい加減にしないと貴方の頭に爆裂魔法を叩き込みますよ!?!」

先輩の怒号を聞き流して、遠方に見えるジャイアントチキンを観察する。ジャイアントトードよりも少し小さいくらいの鶏で、前世の鶏とそう変わらない。…いや強いていうならば足が長くダチョウっぽく見える…だろうか? あとは結構な数で、赤と白が頻繁に入り混じるせいか見ると目がチカチカとしてくることぐらいだろう。

なにかを啄ばんで食べている事は分かるが、その何かはここからは認識できない。

あの大群の腹を満たすというのは大変そうだ。それ相応の狩場みたいなのが必要だろう…!?!これから殺してしまうから、別に気にしないでいい事なのだが…自分はどうでもいいことを考える癖があるのでしようがない。いけないことだと分かりつつも、治しようがないもので…この癖の様なものは一向に治る気配を見せない。セシリーに「それ、治してもらえますか?」とお願いされない限り無理だろう。

「取り敢えずここから爆裂魔法で爆殺しようと考えてるんだけど、届

く？」

「はあ…全くこの人は…ええ！十分届きますよ！丁度餌を食べてるようですし、いい感じに纏まってるので一掃も可能でしょう!!」

「そっか…それじゃあ、先輩」

「何ですか？まだ何か？」

「最強の爆裂魔法って撃ってみたくないですか？」

そう先輩に微笑み掛けると、赤く輝いた双眸が私を射抜いていた。

私の能力である『純化させる程度の能力』というのは、言ってしまうえば『神を生む力』だ。

ここでの『神』という言葉の意味は、森羅万象に宿る本質であり、名付けられる前の自然や道具が持つ純粋な力の事だ。

この純粋な力は名付けられる代わりに力の大部分を失ってしまうが、現世に顕現し力を発揮できる。その失った部分をこの能力の効能で取り戻すことができるのだ。

純粋な力というのは計り知れない…分かりやすい例えを言うなら単騎で国を相手取れる程の力を得るのは確実…更に、その気になれば簡単に世界を滅ぼせるとんでもない能力だ。本当にただの人間にこんな力を与えるってどうなってるんだろうか神様たち。私ももう現人神の様なモノなんだけど…まあ、今はそんな事を考えたってしょうがないか。

話は少し戻るが、この『純化させる程度』は自身だけではなく、第三者にも掛けることが出来るのである。つまりはそういう事。

「おおお!?何ですかこの漲るような魔力は!?!ちよつ、待つ、や、ヤバイです!!今この場で爆裂魔法を撃たなければ私が爆裂しそうです!」

私の能力を使い、杖の『魔力増幅』という機能と、魔力『そのもの』を純化させ人間の限界を軽く超えてしまった先輩は魔力の渦の中心で騒いでいた。まあ、一気に増えた自分の力に驚いて魔力の制御が乱

れたんだろう。あの冷静沈着なピツコロだつてネイルと同化した時は『フハハハハ!!勝てる!!相手がどんな奴であろうと負けるはずがない!!』とかハイテンションで言っていたのだし、こうなるのも仕方のない事だろう。今度は『爆裂魔法』という名前を純化させてみたいが：多分先輩自体を純粋な存在にしないと人間の体が耐えられず決壊するだろう。解除はいつでも可能なのでまあ、後々検討しておこう。「もう、打ちたくて仕方ありません！正直こんな状態で爆裂魔法を撃てば史上最高の爆裂魔法になる事は間違いないありませんが、どうなるかは私にも分かりません！何かあつたらお願いします！：刮目せよ！我が史上最大にして最高の爆裂魔法を!!『エクスプロージョン』!!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

天地開闢：とまではいかないが、天と地がひっくり返つたような衝撃と轟音が人体の五感を通して伝わってきた。想像以上に威力が高すぎて、正直この離れてる地点でさえ危険なんじゃないかと：考え始め薄眼を開けると。

(えっ……………最強つてこう言うことを言うのかな?)

目の前には前と比べ物にもならない程に炸裂した爆裂魔法：いや、第三者目線でこれを見るのは初めてだけど、明らかに前喰らつた時よりデカイ爆発だ。前の爆裂魔法が人類最強の魔法だとしたら、コレは何て表現したらいいんだろう……人外最強?：いや：変なTシャツの事を考えるとそうでもないのか?だけど、あれも規格外の存在だからなあ：あれと比べるのは少し可哀想か：でもこの世界で最強火力の魔法は?と聞かれれば私はこの魔法以外考えられない身体になつてしまった。

それ程までに今の光景は強烈過ぎた。この光景を作り出したのが先輩だと考えると、本当に先輩が魔王に見えてくる。

：もし仮に私がこれに直撃でもしたら普通に死ぬな私……紙装甲だから簡単に焼け切るんだろうなあ……。前は生き延びたけど。

魔法も出し終え、煙と未だ残っている風の残り香しか残っていない

爆裂魔法使用の跡地を見る。

：綺麗に向こうの山が消失していた。勿論、討伐対象であるジャイアントチキンも、とうにか先ほどのジャイアントチキンが過剰火力を食らって可哀想だな。原因私だけど。まあいいや討伐依頼されていたくらいの魔物なんだから。

立ったまま笑い声をあげる先輩に目を向ける。

「フハハハハ！どうですか我が力の爆裂魔法は！不死身だろうが不老不死だろうが、我が爆裂魔法で葬って差し上げましょう！！フハハハハ！！」

最高にH i g h ツ!! って奴ですな先輩。分かるようで分かりません。

高笑いを上げている先輩の横でもう一度爆裂魔法を放ったところを見る。

……今回は初めてとんでもないものを生み出したんじゃないか？と思ったのだが、最強の片鱗も見えたし別にいつか！と考える事にした。

相変わらずの自分の狂った思考に苦笑を浮かべるが、今は取り敢えず先輩を宥めることにした。

「先輩？今、最高にH i g h ツ!! って事は分かりますが、落ち着いてください」

「落ち着く？この状況に落ち着いて入られますか！今までの爆裂魔法とは常軌を逸しているこの高揚感と開放感、そして撃ったというのに立っていられる新感覚……!! なんならもう1発撃てる予感すらします！」

こんなありきたりな言葉じゃあ先輩が落ち着かない事は一夜過ぎとして理解はしていた。

完全に同化したピッコロ：又はジョースターの血を吸収したD I Oみたいなになってるなあ……と思いつつ、先輩をどうするか考える。

漫画でよくある首トンで気絶させるか？とも思ったけど、私の力でやったら首トンではなく首ズバになってしまいそうなので却下。

もつと上の爆裂魔法を撃たせて落ち着かせる……？いや待てどうして

そうなった？逆に興奮するだけ……いや、単純に2発目を撃たせて大人しくさせるか？確か先輩って本来なら爆裂魔法1発を撃つともう何も行動できなくなるとか言ってたし。（喋れたりはできるらしい）

あと1発撃たせたら流石に行動不能になるでしょ。

いや、そもそも先輩が落ち着くのを単純に待とうかな……。

「次の獲物を探しに行きましょう！今日は絶対に2回目の爆裂魔法を放てる気がするんです！……何をしてるんですか早く行きますよ！」

ああ……いや別に先輩が先に言ってくれるんらいいや。

じゃあ適当に探すとするかあ、どつかに居ないかな……先輩の目にかかるモンスター。

◇

先輩が適当なモンスターの集落を爆撃して自然破壊が順調に進む中……私はとんでもない化け物を生み出してしまったと二回目で確信させられた。

いや、1回目で思っているのが普通なんだろうが……それはホラ、まだ賢者タイムに至っていなかったというか……まあ、ともかく完全燃焼した先輩は白く変わり果てていた。魔法の代償だろうか……とも思ってたけど先輩本人から久し振りにこんな興奮して疲れました……と言っていたので多分違うと思う。多分白く見えているのはA.T.フィールドの所為だ。一方通行みたいに紫外線を遮っちゃって色素抜けちやつた☆とかそういう理由だろう。きつと。

これからの冒険が楽しみですね……なんて悠長な事を先輩は言っているが、アレはこれからの冒険全てをつまらなくさせる一撃だと思う。当たりさえすれば絶対的な勝利を得られるとかとんでもない魔法である。それでも私が原因でそういう威力になっているので、結局のところ解除すれば元どおりになるのだが先輩のあの興奮具合からみるに多分それを良しとしない。いや、もしかしたら先輩の中にある浪漫に突き進む意志がその爆裂王道を邪魔するかもしれないが……その可能性は薄いだらう。

軽々しく人を純化させるもんじゃないな…と少し後悔した。

自分からこれからの仲間と共にする苦楽という楽しみを潰してしまい、落ち込んだ。

なんて馬鹿なんだろうなあ…と街に戻っている最中。

アクセルの街の衛兵さんが少し怒った様子でこちらを睨みつけていたのでなんだろうと話しかけてみたら、先輩の爆裂魔法の振動と轟音のお陰で、古い建物や建造中の建物が崩れるは、飼育していた動物たちが驚いて何処かに逃げ出すはで街が大惨事になり大変だったらしい。

しかも、他の街では先輩という異常が日常化されていないので、この世のものとは思えない魔力の波動が二度にも渡って放たれたので魔王軍の新兵器かなんかと勘違いして街全体が警戒態勢に入り…と多大なご迷惑を掛けたらしく、衛兵の人たちから小一時間ほど怒られた。力尽きてるにも関わらず、怒ってる衛兵に反抗している先輩の姿には遅いとしか思えなかった。私も真似しようと思う。その場で宣言したら、やめてくれ…と衛兵さんから言われた。

また明日も爆裂しましょう！と、衛兵さんから2週間爆裂魔法禁止通告を受けたというのに、全く守ろうとしない先輩の姿に軽く尊敬を抱く。

スキップと鼻歌を歌いながらの帰宅なので大分機嫌が良い様だ。

そんな先輩に手を振りながら別れて、私も教会に戻る。

私も嫁に会えると分かってスキップ気味になってるので先輩の事を言えないが、愛妻なんだから会えて嬉しいのは当たり前で、仕方の無い事だと私は思う。

ふと、そういえばセシリーにプレゼントなんて送った事なかった…と思い立ち、商業が盛んなエリアまで来て、何か買おうとはしたものの。

(…セシリーって、ところてんスライムやロリシヨタ、アクシズ教とか入信書以外何が好きなんだろう?)

セシリーの買って喜ぶモノというのが全く知らなかった。

私は妻を世界一愛している自信が大いにあるし、情事の際はセシリーの弱いところなんかも知り尽くして彼女をちよろつと苛めてたりして楽しんでる節があるが、好意の対象が分かりやすすぎるセシリーの行動からセシリーの好きなものの種類が極端すぎて分からないのだ。

何かプレゼントはしたいがセシリーが買ってきて喜ぶものといえるところでんスライム：しかしそれは毎日貢いでいるので余り喜ばれるとは思えない：いやセシリーの事だから飛び回って喜ぶ可能性はあるけど：流石にそれはプレゼントとは言えないだろう。

私はこういう時にセンスというものが皆無に等しいな。前世の彼女の最期のプレゼントは確か……何だったか……思い出せないな。

過去の経験から何か得ようとしたが何も得られず途方に暮れている内に『ウイズ魔道具店』という一風変わった店舗に辿り着いていた。ウイズ？……何処かで聞いたことがあるような……？

冒険者たちの会話から知ったんだ……何処で聞いたかは自分でも覚えていないが、まあ聞き覚えのある店だったので中に入ってみた。

カラン

「いらっしやいませー！ウイズ魔道具店へようこそ！」

店員らしき人から迎える言葉を受けたが特に何も返さなかった。やけに良い声質をしているのでなんとなくそちらの方を見てみれば、かなり美形の顔立ちをした店員の人が立っていた。しかも私の嫁のセシリーよりも大きいかもしれない胸も持っていて普通の男性なら顔よりも胸の方に視線が集まるだろう。

成る程、確かに自分の欲求に素直な輩が多い男性冒険者なら話のネタにしているもおかしくは無い人物だ。そういう尾籠な話をギルド内でするのも可笑しくはないし、私も何処かで聞いていたのだろう。

店の名前からある通りウイズという人がこの店の店主なんだろうけど……なんで店員がアンデッドなんだろう？しかもこの雰囲気はかなり和らいでいるが、相当な手馴れ……最上位の存在と言っても可

笑しくはないな…こういう存在を純化すればどうなるんだろうか。探究心が芽吹くが今はそんな物は踏みにじった方が身の為だろう。多分、私じゃ経験値的な問題と相性的な問題から絶対勝てない。

こんな存在をしている人が店員をしているとか…ウイズと言う人は一体何者なんだ？

量産型なろう系主人公かななのだろうか？

…疑問は絶えないが適当に目の前のピンク色をしたポーションを手取る、色合いからして回復用か媚薬の類だろうか。

「すみません。このポーションの効能ってなんですか？」

「はい。そのポーションは衝撃を与えると爆発するポーションですね」

何それ面白そう。パーティグッズかな？

「じゃあこの横の棚にあるのは？」

「空気に触れると爆発するポーションですね」

「さらに横にあるのは？」

「水に触れると爆発するポーションです」

「これは？」

「魔力を注ぐと爆発するポーションです」

爆発オチなんて最低！ ……確かこんな感じのニュアンスだった気がするが、違っているような気もする…。

爆発物ばかりで少し危ないがどうせクラッカー程度の爆発しか起こさないんだろう。小さな小瓶だし、そんな危険なものを易々と店の棚…しかも最初の街に置いてあるとは思えない。

それにクラッカーといってもモンスターに飲み込ませてから爆発させるとかしてそこそこのダメージを与えるのも良いかもしれない。

まあセシリーを喜ばせるというより驚かせる…いや勧誘にも使えそうな気がする…取り敢えず買っておこう。

「このポーション買います」

「えっ!？」

「えっ」

「あ、いえ、すみません。その商品棚の所は中々売れなくて…まさか即

決で買われるとは思っていなかったの……」

「こんな面白そうなのに売れないんですか？なんて見所のない……あ、因みにいくらですかね？」

「はい、一本10万エリスです」

(結構高いな……いやでも、クラッカーってこの世界の技術じゃあまだ中々生み出せないものだろうし……爆発ポーションっていう形になってるから更に値段が加算されたのか……だとしたらこの商品は中々のお買い得商品なんじゃ?)

そこまで考えてそれぞれ別種の爆発ポーションを2本ずつ買い、80万エリスを店員の人に払い、泣きながら「やつと砂糖水だけの食生活から抜け出せます！」っと喜んでいる店員さんを横目にセシリーにこのポーションでどんなドッキリをしようか考えていた。

セシリーも爆発の一つや二つでビビるような女じゃないって事は私は十分理解しているつもりだ。……逆にそれで怖がっていたらギャップ萌えで私が死ぬ。……やばい想像したらめっちゃ胸が苦しい……。すつごい今セシリーに抱きつきたい。そして頭を撫でたい……！

店を飛び出して教会に帰ろうかと考えたがこの店にはまだ面白そうな物が沢山ありそう。残りは20万エリスしかないが、何か買うかと思う、適当に商品を見てみると気になる品が目に入った。

「店員さん。この虹色のポーションって何ですか？」

なんか昔のアニメのゲロを表現した物にも思えるが、普通に虹色のポーションという物に惹かれたのだ。虹色というと、モンハンの虹色の着彩設定があったが、一々アレをやる為にフリークエスト又は村クエストを全てやらなければいけないのだから面倒くさかったな。

「あ、それは昔とある冒険者の方が……『店主さん、何も言わずにこれをこの店に置いてください。効果は保証します。そして出来ればリア充のクソ野……幸せそうなカップルの彼氏のクソ……彼氏の方に譲って飲ましてください。お金は出来る限り高めで』……と言ってここに置いて行っただけです。確かドキドキノコ？という変わったキノコを使用したポーションらしく……効能は分かかっていないんですが、

彼の気迫から並々ならぬ思いを感じ取り、今までこの棚に置いていたんです」

成る程、私以外の転生者の遺産という訳か……いや死んだかどうかは分からないが、ともかくドキドキノコを使用している時点で日本人なのは間違いない。どんな特典かは分からないが大方、モンハンに関連する物を取り出せる能力か、錬金術やら調合術と言った類の能力持ちなのだろう。店としては効能の分からないポーションを置いておくという行為に少し疑問を持つが、まあ、私もドキドキノコのポーションというのは気になる。というかドキドキノコのポーションならば普通緑色ではないのだろうか、アイテムアイコンでは常に緑色のキノコの表示だったのに……何故虹色のポーションになったのだろうか。流石ドキドキノコだな。

「店員さん。これ買います。いくらですか?」

「なるべく高く……とあの方は言っていました。効能すら分かっていないポーションなので値段は5万エリスに設定してあります。一応、ポーション類の中でも破格の値段なんですよ?」

大分値引きされた値段の様だ。

五万エリスを支払い、ありがとうございました!と喜色を含めた声で言ってきた店員の人に軽く手を振って応える。あちらも笑って見送ってくれたので今は気分が良い。美人の笑顔を見るといのは何処か心が高なるものだ。それは男女問わずだろう。

しかしまあ、効能が分からないと言っていたが効能が分からないのはこのポーションを作った本人もそうだろう。というか、ドキドキノコを何故ポーションにしたんだろうか?別にそのままキノコ単体で売ってもいいと思うが……いや、単に食用として誤って食べられるのを危惧したからか?このポーションを作った転生者の意図は知らないが、まあ、物好きな日本人もいたものだ。

物好きといえばあの店もそうか、今度行ってみたら更なる面白い商品があるかもしれない。金に余裕が出来たらまた行こう。